

第3章 平成8年度山口大学構内の試掘調査

第1節 吉田構内の試掘調査

1 基幹環境整備（独身宿舎・国際交流会館排水管布設）に伴う試掘調査

(1) 調査の経過

山口市による公共下水道本管の吉田構内南縁側市道への布設計画に伴い、構内でもいくつかの地点において、下水排出方法の変更がなされることになった。これに伴い埋蔵文化財資料館では、平成7年度には排水処理センターからこの本管への接続ルートについて、公共下水道布設接続に伴う試掘調査及び事前調査を行っている。今回の調査は、独身宿舎及び国際交流会館において公共下水道へ排水を接続するための工事が、吉田地区基幹環境整備の一環として予算措置されたことに伴い実施した。

調査期間は、同じ基幹環境整備として予算措置された、南門からの構内道路沿いの外灯新設に伴う発掘調査と一部重複しており、この間、実質的に2件の調査を並行して行った。10月9日に調査区設定を行ったのち、10月15・16日に独身宿舎、国際交流会館、外灯新設予定地の順で重機掘削を行い、10月25日に独身宿舎及び国際交流会館の調査区埋め戻しを行うまでの約2週間を調査に費やした。

(2) 独身宿舎調査区（Fig.15・16, PL.6 (1) (2)）

排水管布設の計画管路は、独身宿舎南側ほぼ中央部に位置する、排水浄化槽のコンクリート構造物から、構内外の境界となる東西方向のブロック塀まで、南に一直線に延びるものである。調査では、この計画管路を中心に東西方向に幅2m、南北方向はコンクリート構造物に接する位置を北端とし、南端はブロック塀の約1m手前までの長さ7mの調査区を設定した。このうち、ブロック塀側は、掘削による塀への影響と重機の取り回しを考慮して、当初より掘り残しが出ることを止むなしとしていたが、北側



Fig.14 調査区位置図

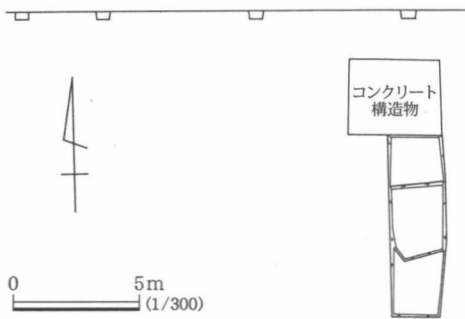


Fig.15 独身宿舎調査区設定位置図

についても、掘削開始直後に給水管に遭遇したために重機バケットの駆動半径を確保することができず、掘削を断念せざるを得なかった。結果、遺構検出面となるべき位置まで調査できたのは調査区中央部の長さ約2.5m分、面積にして5㎡にとどまった。

基本層序は、第Ⅰ層が黄灰褐色粘質土の造成土、第Ⅱ層が暗茶褐色粘質土の水田耕土、第Ⅲ層が暗黄褐色粘質土の水田床土である。第Ⅳ層以下が地山となる。第Ⅳ層は灰青色粘質砂、第Ⅳ'層は暗灰色粗砂でⅣ層中に部分的にブロック状に混入する。

遺構検出面として捉え得るのは第Ⅳ層上面であるが、今回は遺構及び遺物を検出することはできなかった。第Ⅳ層は、河川堆積層のような明瞭な流れを想定できるものではないが、粘質砂層であり部分的な水流の影響による2次堆積土であることが推察された。そこで、調査区中央部全体で第Ⅳ層を約25cmほど掘り下げて遺物包含の有無を確認したが、遺物の出土はなかった。調査面積は小さいのだが、結果的に工事予定地の約3分の1の面積を調査したことになり、工事予定地内に埋蔵文化財の所在は認められないと判断した。

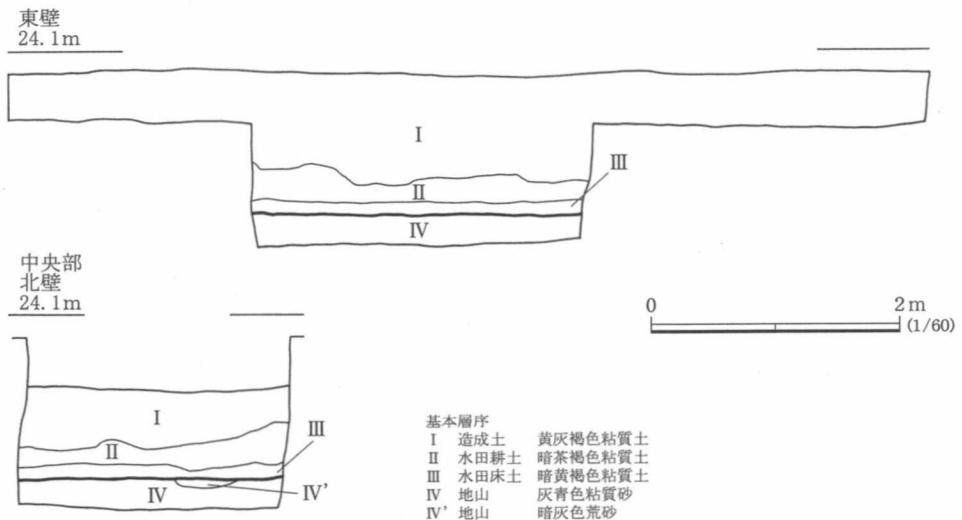


Fig.16 独身宿舎調査区土層断面図

(3) 国際交流会館調査区 (Fig.17・18, PL.6 (3) (4))
 排水管布設の計画管路は、国際交流会館西端から、構内外の境界となる東西方向のブロック塀まで南に一直線に延びるものである。工事予定地の現況は芝生張りの国際交流会館前庭である。調査ではこの前庭に、排水管計画管路を中心に東西方向に幅2.5m、南北方向には国際交流会館から南に約6m離れた位置からブロック塀の手前約2mまでの長さ7mの調査区を設定した。調査面積は17.5㎡である。今回の調査では、河川及び水路を検出した。また、調査区の北西隅に攪乱がみられたが、これは昭和61年実施の国際交流会館新営に伴う試掘調査Aトレンチの一部と推定できる。

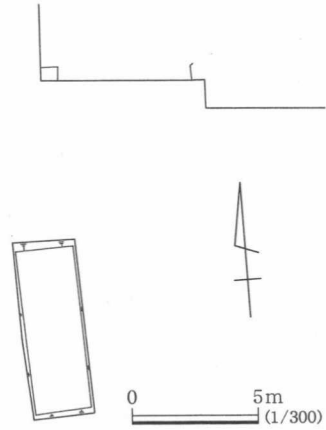


Fig.17 国際交流会館調査区設定位置図

基本層序は、第I層が黄灰褐色粘質土の造成土、第II層が暗灰褐色粘質土の水田耕土、第III-1層が黄茶色粘質土・第III-2層が暗灰茶色粘質土の水田床土となる。第I層は土壤改良が加えられているようで、土が固着しており、重機のバケットが滑ってなかなか

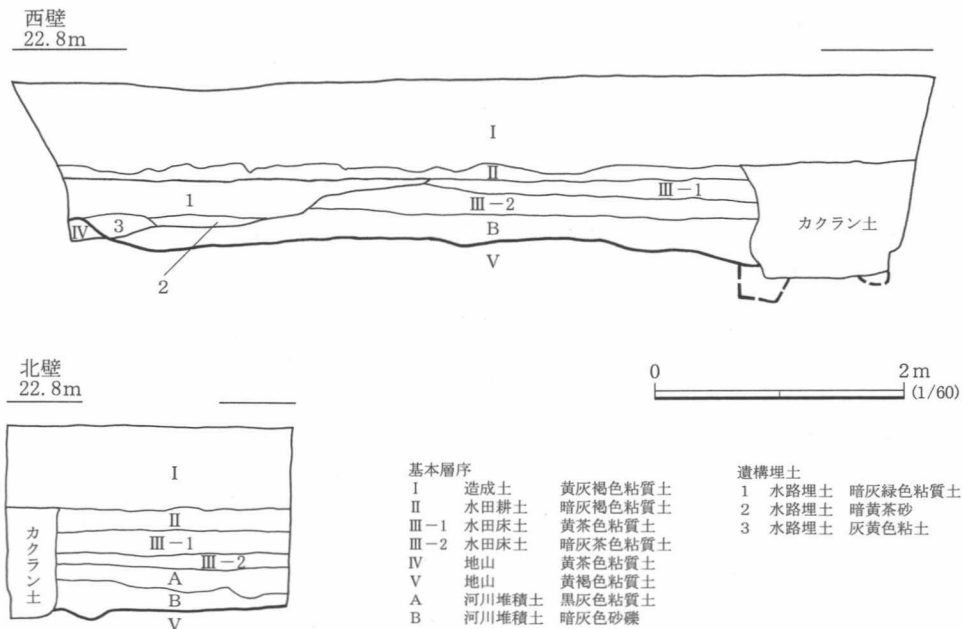


Fig.18 国際交流会館調査区土層断面図

か土を捕らえないため掘削に手間取った。第Ⅳ層以下が地山で、第Ⅳ層が黄茶色粘質土、第Ⅴ層が黄褐色粘質土となる。A・B層は河川堆積土で、A層が黒灰色粘質土、B層が暗灰色砂礫である。A・B層は河川堆積土であるので、本来的には地山と称すべきものではないが、これらの土層、特にB層は今回調査区の全面に広がるものであり、A・B層の土色・土質から考えてこの土層を形成した河川は、昭和61年実施の国際交流会館新営に伴う試掘調査Aトレンチで検出され、幅30m以上と推定された河川と同一のもの比定できる。そこで、堆積作用の大きさから判断して地山形成作用の一部として捉えることとした。B層は調査区西壁で見ると、北側で徐々に深くなっている。この様子は、北壁でも確認でき、北壁ではB層の上部にA層の堆積がみられる。広い河幅を持つため、川底の状態も一様ではなかったことが推察できる。旧地形から考えて、北西方向、すなわち現在の経済学部商品資料館の方向へ流れていたと推定できる。

遺構としては調査区南半で水路を検出した。これは、第Ⅲ層の水田床土上面が検出面になることから、近世以降の水路と考えられる。調査区では東側の肩部をわずかに検出できただけであるが、旧地形から判断して流路方向は南南東から北北西と推定できる。人為的な溝であるのか自然流路であるのか不明瞭である。

遺物としては、調査区全体で少量の須恵器・土師質土器・弥生土器が出土しているがいずれも小片で図示できない。

(4) 小結

今回の調査では、調査面積が小さいこともあり、近世をさかのぼる遺構は検出することができず、遺物の出土も少量にとどまった。しかし、独身宿舍調査区及び国際交流会館調査区の両調査地点で、水田耕土・水田床土が良好に残存していることを確認した。これにより両地点の周辺では、大学統合移転時造成による土地の削平が加えられておらず、旧地形の改変が最小限であることが判明した。標高の高い独身宿舍調査区では、吉田遺跡の低地部とは異なる地山堆積を見せており、昭和41年度に吉田遺跡調査団により実施された第Ⅱ地区の発掘調査で榎野寮から農学部附属家畜病院にかけて検出されているような、柱穴等の遺構が周辺に埋存している可能性が推定できる。今後とも施設整備計画にあたっては慎重に対応して行く必要があろう。(村田)

2 基幹環境整備（外灯新設）に伴う試掘調査

(1) 調査の経過

外灯新設工事は、基幹環境整備の中でも重点的な項目として取り扱われており、ほぼ毎年予算化され計画的な整備がなされてきている。今年度は、南門から構内への構内幹線道路に沿った整備が計画された。計画は、野球場とサッカー場の間を通る道路の北西側の路肩に、外灯を新設するというものである。管路の起点が、平成6年度実施のグランド屋外照明施設新設に伴う発掘調査Aトレンチの位置にあたる照明塔であること、また管路が、昭和42年度に吉田遺跡調査団により発掘調査が行われた第Ⅲ地区南区を横断することから、これらの調査で検出した遺構に影響を及ぼすことが確実であった。このため、管路の敷設ルートの検討も含めた試掘調査が必要であるとの埋蔵文化財資料館運営委員会の判断により、埋蔵文化財資料館では10月9日から11月24日までの期間、発掘調査を実施した。

調査では、サッカー場南東縁辺に設置された排水側溝の南東縁に沿って東西幅3mの調査区を2つ設定し、北東側を南北長52mのA調査区、南西側を南北長50mのB調査区とした。この調査の平面基準については、調査区北西壁の設定ライン、すなわちサッカー場に既設されている排水側溝の南東縁により形成される南北方向の直線をns軸と設定した上で、A調査区北西隅を原点として南東方向への移動距離によって表示する。また、ns軸に直交する東西方向の直線をew軸として、ns軸同様にA調査区北西隅を原点とする。A調査区で河川1及び河川2を、B調査区で河川3及び溝1をはじめ多数の遺構を検出した。

(2) 基本層序 (Fig.21・24, PL.8)

基本層序は次の順である。第Ⅰ層は褐灰色粘質土・淡赤褐色砂質土（マサ土）による表土である。第Ⅱ層は暗茶褐色粘質土・暗灰緑色粘質土・砂礫土などの統合移転時造成土で、調査区が長いためにそれぞれの場所で土質は異なる。第Ⅲ層以下は地山となる。第Ⅲ層は黄灰色・黄灰褐色・黄茶褐色シルトが中心であるが、B調査区ではns=85m付近で青灰色シルトがみられる。B調査区では、ns=90m付近から南西方向にかけてには第Ⅲ層の暗灰色砂・暗黄灰色砂

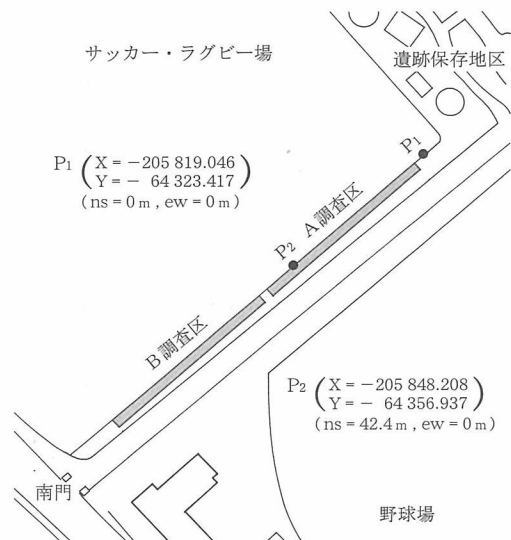


Fig.19 調査区位置図

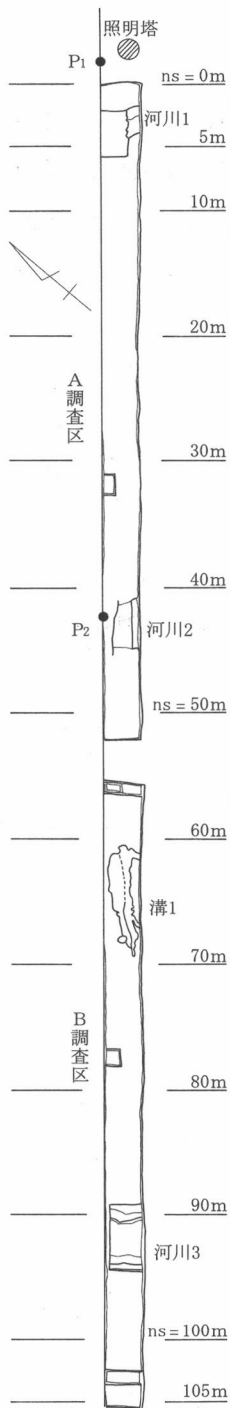


Fig.20 調査区設定位置図

礫土がみられる。第Ⅲ層上面が遺構検出面であるため、基本的に第Ⅲ層以下の土層は遺構の周辺や遺構状況及び土層確認のための観察トレンチで確認しているだけである。第Ⅳ層はA調査区では青灰色シルトまたは青灰色粘土、B調査区では第Ⅳ'層の赤褐色粗礫となる。

調査区を設定した、構内幹線道路とサッカー場南東縁辺の既設排水側溝との間は幅約6mで、道路面はサッカー場グラウンドレベルよりも約1m高くなっている。その間は道路からサッカー場にかけて緩やかに傾斜する法面を形成している。第Ⅰ層及び第Ⅱ層の薄い堆積の下は直ぐに第Ⅲ層となり、地山検出面は法面と平行し南東-北西方向に傾斜している。このことから、法面は統合移転時造成に際して、削り取りにより形成されたことを推定できる。

(3) 遺構

3条の河川と1条の溝、大小の土坑と柱穴を検出した。調査後、遺構が完全に消滅するわけではないので、調査遺構の多くについて掘り込みは部分的であり、検出のみにとどめた遺構も多い。統合移転時造成による法面形成のために、遺構は概して南東側で残りが良く北西側で削平が大きい。また、A・B調査区北西側には溝状の攪乱があり、A調査区北東端では幅が大きく約2mである。調査区南西端に近づくと、幅は狭まり幅約60cmになる。これが、B調査区では幅約30cmになる。これは、この攪乱に3種類の内容が認められるからである。統合移転時造成の際に設けたと思われる素掘り仮設溝掘削による攪乱が幅約60~80cm、更に後の工事掘削による攪乱が幅約2m、サッカー場整備の際の排水側溝敷設工事による攪乱が幅約30~50cmである。前2者はA調査区で、後1者はA・B調査区で見られる。以下、掘り込みを加えた遺構について述べる。

河川1 (Fig.21, PL.7 (2) (3) (4)・8 (1) (2))

A調査区北東端で検出した。調査範囲では北西側及び北東側が攪乱されているため、河川の南肩を含む一部の検出である。攪乱は、北西側は上記の仮設溝掘削及び後の工事掘削によるもの、北東側はグラウンド照明塔の支柱基礎工事によるものである。このため、現況

吉田構内の試掘調査

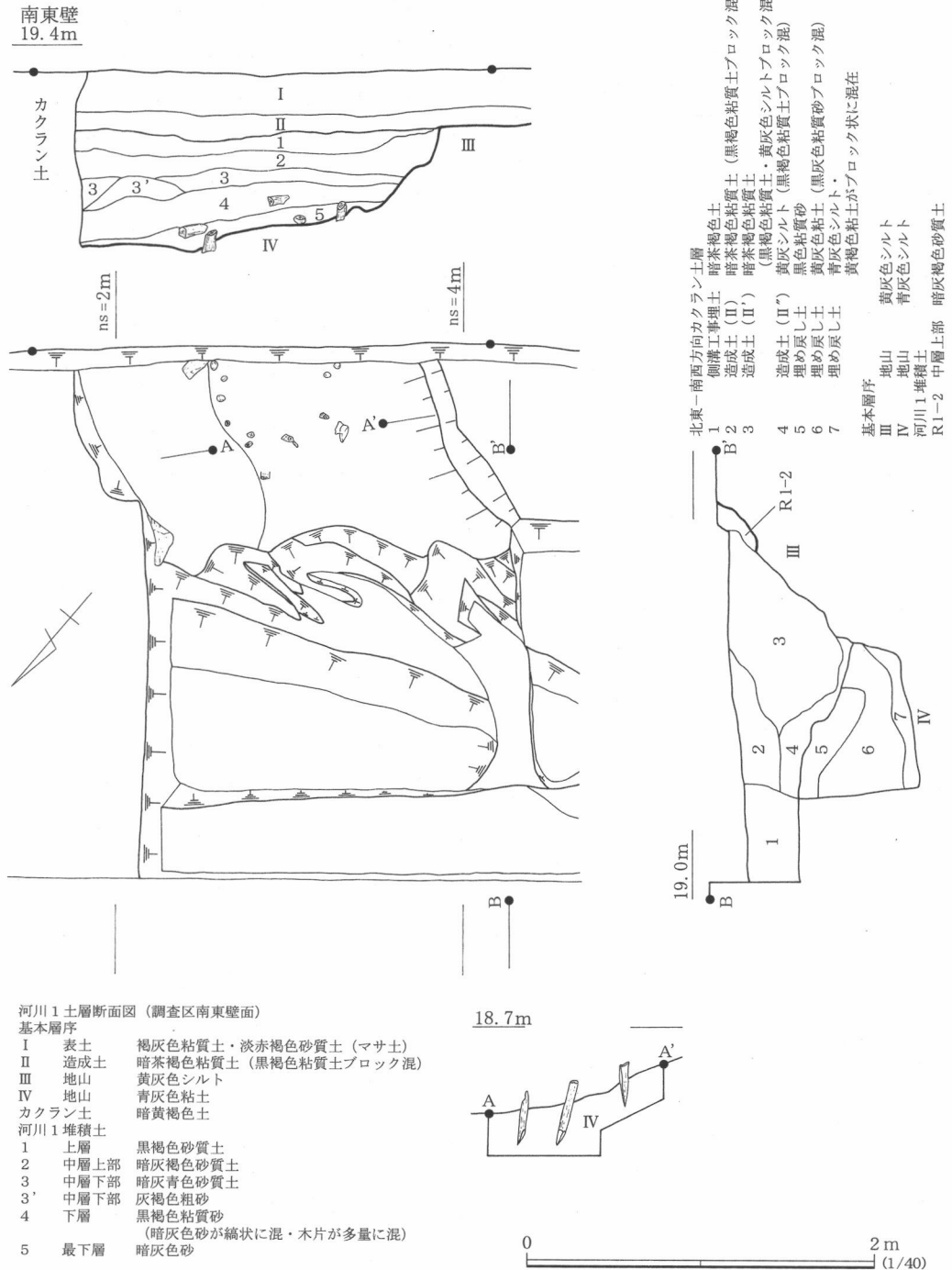


Fig.21 河川1平面図・断面図

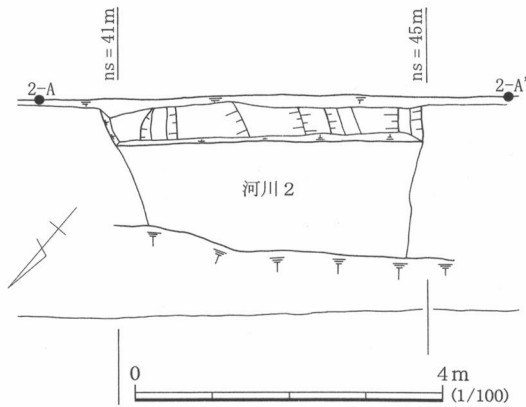


Fig.22 河川2 平面図

で河幅約2m、延長約1.2m分を検出した。遺構検出面から最深部までの深さは約70cmである。検出した南肩の方向と、旧来の地形から推定すると、東から西への流路方向を持つと考えられる。また、河川1は平成6年度実施のグランド屋外照明施設新設に伴う発掘調査Aトレンチで北肩を検出し、調査区外南側に広がる河川と同一のものであることは、2つの調査区の位置関係、河川埋土の堆積状況、出土遺物の内容から見

てほぼ確実である。平成6年度調査Aトレンチの検出河川北肩は、攪乱が激しく完全な形での立ち上がりとしては確認し得ていない。しかし、今回の調査で検出した南肩と併せて、河川1の河幅は12m以上と推定できる。

遺構埋土は黒褐色あるいは暗灰褐色系統の砂質土と砂層で、全体を5層で構成するが不整合面はみられない。下層の4層と最下層の5層には流木が多量に含まれていた。河底には木杭が打ち込まれていた。直径3～6cmで河底から上方に約10cmほど残存する。断ち割った3本では河底から約15～30cmの深さまで打ち込まれていた。打ち込みの方向は河底に対して垂直ではなく、河底から肩部への立ち上がりに対して傾倒するような角度が付けられていた。調査範囲が狭いため、杭配列を検討できるほどの本数を検出してはいないが、杭の位置と打ち込み角度から考えて、河川の護岸施設のための杭ではないかと推定できる。杭の先端は、鋭く切り落とされて角錐状に仕上げられていた。遺物としては、弥生時代中期～古墳時代前期の土器が出土した。

河川1北西側の攪乱溝の埋土には、おそらくは本来河川1の埋土であったと推定できる黒色・黒灰色粘質砂が大量に含まれていた。この中には、多量の土器が含まれており、それは今回の調査で河川1から出土した土器量を凌ぐものであった。

河川2 (Fig.22・24, PL.8 (3))

A調査区南西寄りで検出した。河川1同様に北西側が攪乱されている。この遺構は、完掘は行わず、南東壁面に沿って設定した、幅20cmの観察トレンチによる部分的な調査にとどめた。河川2は、検出面での河幅が3.4～4.2mで、南東壁面での深さは約50cmであることを確認した。遺構埋土は暗黄茶色砂礫土で遺物は出土しなかった。

吉田構内の試掘調査

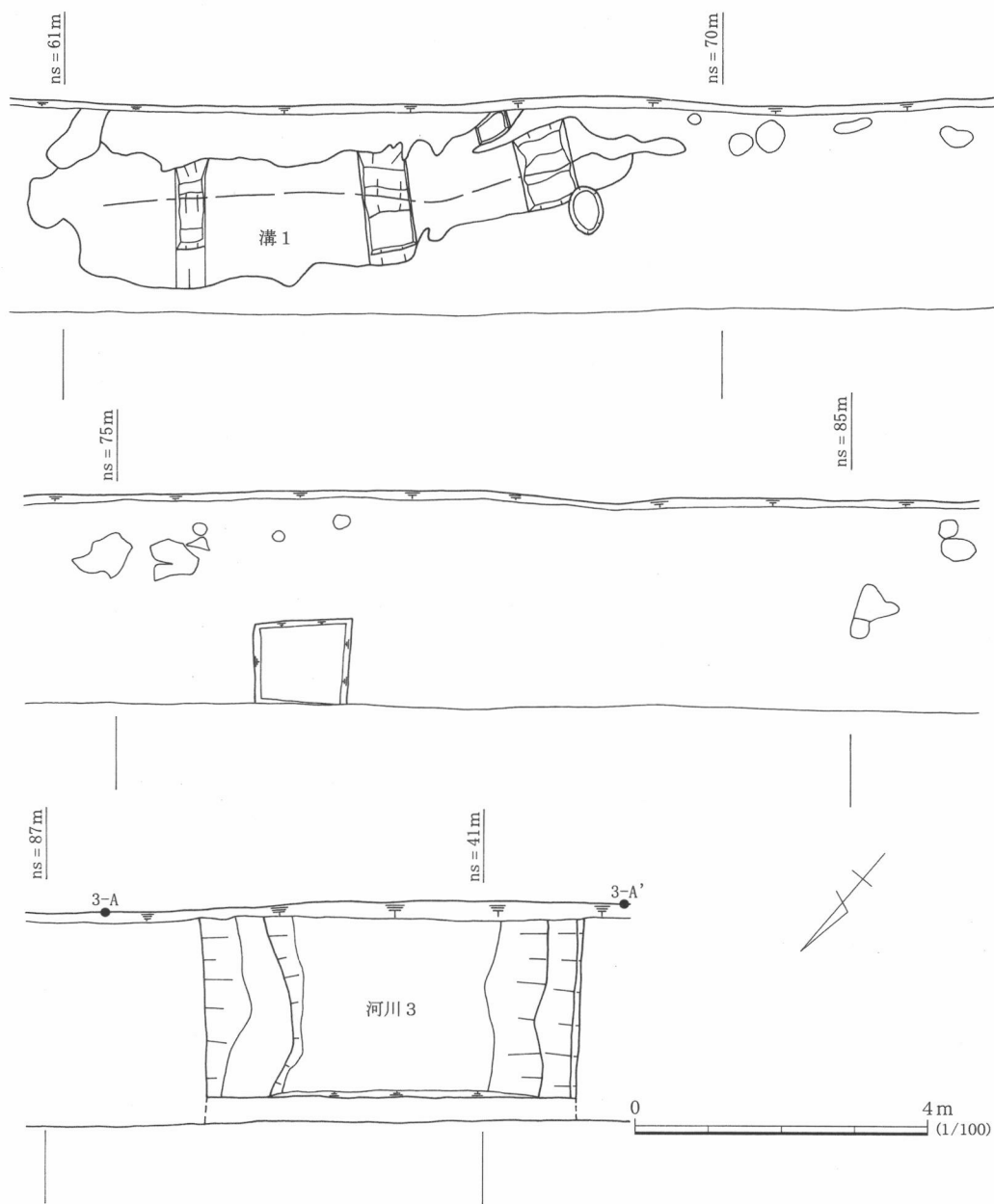


Fig.23 B調査区遺構配置図

河川3 (Fig.23・24, PL.8 (4))

B調査区南西半で検出した。検出面での幅5～6mである。この遺構も完掘はしていないが、南東壁面で計測して、検出面から約55cmの深さまでを調査した。流路の方向は南東

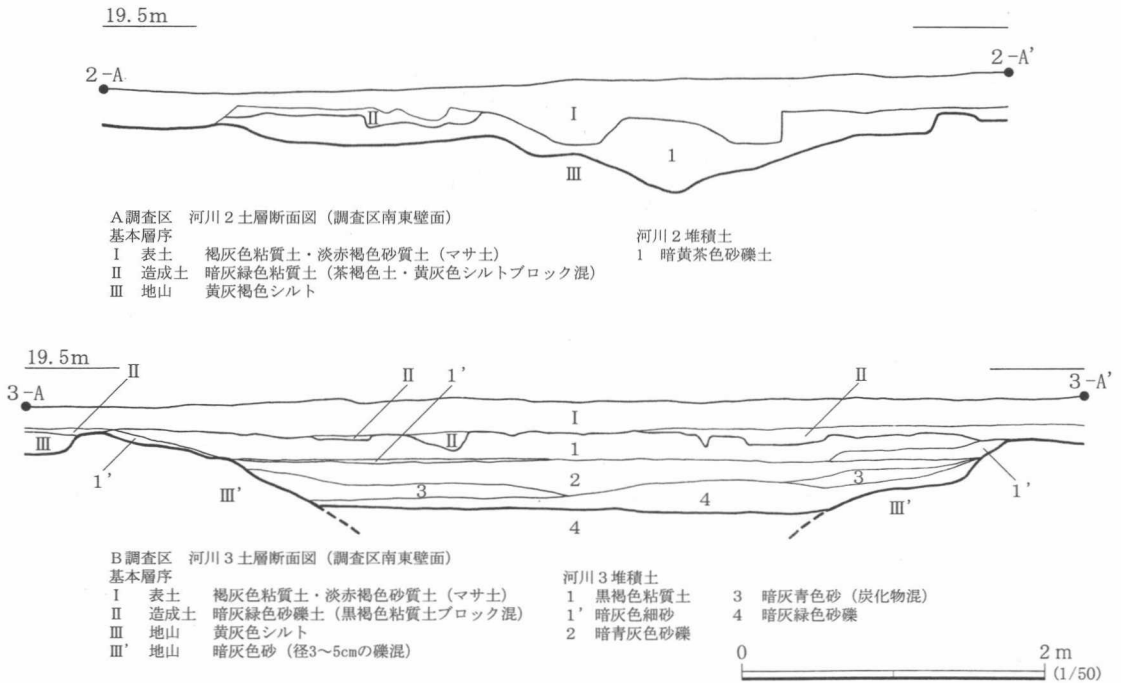


Fig.24 河川2・3土層断面図

から北西と考えられる。3-AA'の土層ではわかりにくい、遺構の北東肩は主として第III層：黄灰色シルトにより形成され、南西肩は第III'層：暗灰色砂によって形成されている。これは、この遺構が南西方向に大きく広がる河川に包括できる可能性を示すと考えられる。逆に、そのように包括した上で、その一時の流路をまとめりとして捉えることが可能であったため、特に河川3として抽出したものがある。埋土は、最上層は黒褐色粘質土であるが、以下は暗灰色系統の砂礫層でほぼ水平に堆積している。河川埋土3層では、小さな粒状の炭化物が混じる。縄文時代晩期～弥生時代前期にかけての土器が出土した。

溝1 (Fig.23)

B調査区北東半で検出した。検出面での遺構規模は幅約1~2mで、検出面からの深さは最深部で約10~20cmである。総延長約9mを検出した。この遺構も観察トレンチを設定しての部分的な調査にとどめた。新旧2本の溝が切り合い関係にあるようだが、遺構上部が大きく削平されたと考えられ遺構の残りは非常に悪い。溝断面で観察しても2本の溝を明確には分離できなかった。遺物は少なく時期の明確なものは出土していないが、埋土の状況から判断して近世の耕作溝と考えられる。(村田)

(4) 遺物

河川3出土遺物 (Fig.25, PL.9・10(1))

河川3からは縄文時代後～晩期の土器と弥生土器が少量出土した。土器は磨滅した小片が大半であり、時期と器種が判別できるものは少ない。

1は、巻貝による擬縄文とその下にLRの縄文を施す。岩田第二類aに相当する九州の西平系土器と考えられる。2～6は胴部片である。2は巻貝による条痕、3～6は内外面に二枚貝条痕を施す。7は深鉢の底部である。底面が外に張り出している。内外面の調整はナデである。8は浅鉢もしくは壺の底部である。底面がくぼんでおり、風化が激しい。9は弥生時代前期前半の甕の胴部片である。外面はタテハケ後ナデ、内面はナデで、段部に板状工具による刻目を施す。接合痕は確認できない。10は敲石である。円礫を使用しており、表は部分的に研磨を施す。左側の欠損部も再調整の後使用しており、敲打痕が認められる。石質は結晶片岩である。

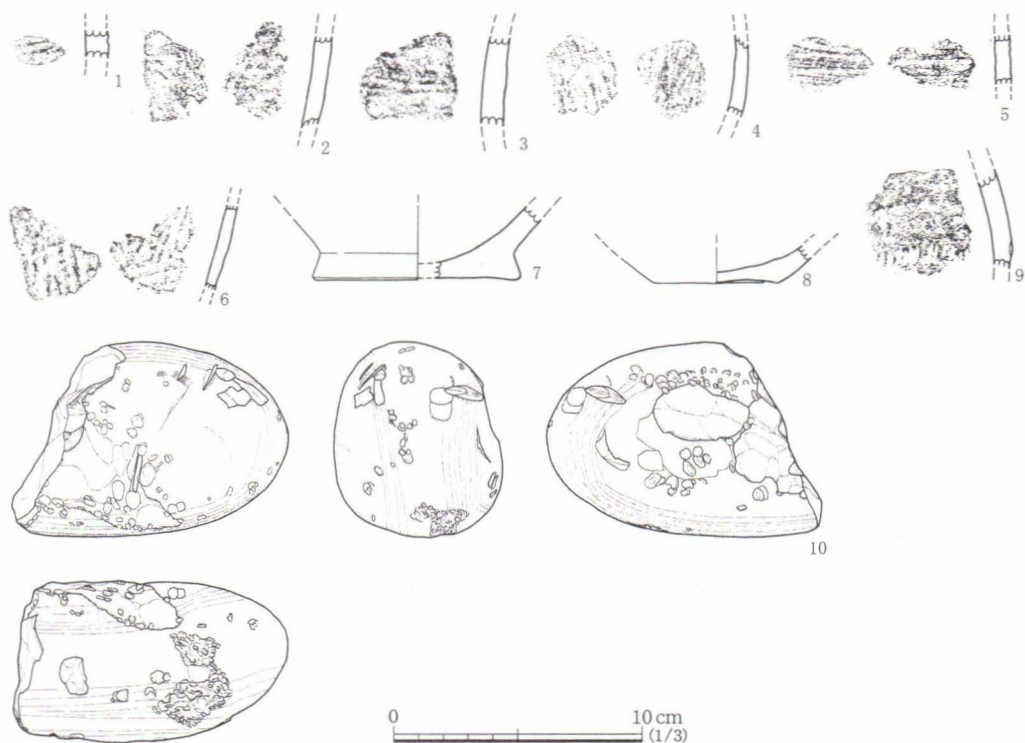


Fig.25 河川3出土遺物実測図

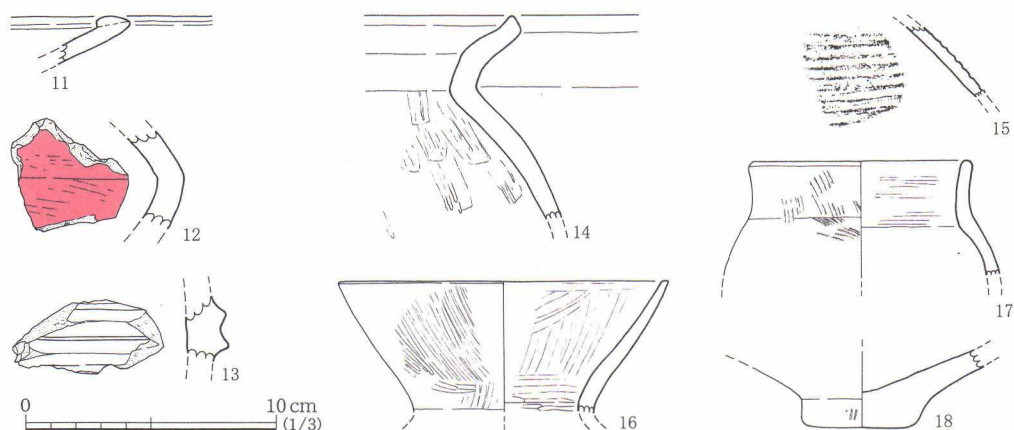


Fig.26 河川1出土遺物実測図

河川1出土遺物 (Fig.26, PL.10 (3))

河川1からは縄文時代晩期から古墳時代前期の土器が少量出土した。

11は縄文時代晩期の浅鉢口縁部である。口唇部をカマボコ状に肥厚させている。12は弥生時代中期の壺胴部である。外面に丹塗り磨研を施す。13は弥生時代中期の垂下口縁壺の胴部である。14は弥生時代後期の甕口縁部である。口唇部は横ナデにより跳ね上げ、内面には削りを施す。15は弥生時代終末期～古墳時代前期のタタキ甕である。外面に1条2.5mm、1cm/2本のタタキを施す。16は土師器壺の口縁部である。口縁部は内湾ぎみに立ち上がり、内外面にミガキを施す。17は土師器壺の口縁部である。口縁部が直立する。外面にタテハケ、内面にミガキを施す。18は土師器壺の底部である。底面は突出ぎみの平底で、風化が激しい。この他に姫島産黒曜石剥片1点が出土した。

河川1攪乱溝出土遺物 (Fig.27～29, PL.11～14)

河川1攪乱溝からは、本来河川1に含まれていたと考えられる土器が大量に出土した。

19・20は須玖系壺の胴部である。胴部にM字状の貼付突帯を持ち、内外面にヨコナデを施す。21、22は跳ね上げ口縁の甕である。23・24は北部九州系の器台である。時期は弥生時代中期と考えられるが、後期に下る可能性もあり今後の検討を要する。23は口縁部、24は胴部で、同一個体と考えられる。外面はタテミガキ、内面はナデを施し、指頭痕が残る。25～28は弥生時代後期の甕口縁部である。外面には煤が付着する。29～32は弥生時代後期後半～古墳時代初頭の甕である。いずれも外面は被熱しており、煤が付着する。29は胴部外面にタテハケ、内面にケズリを施す。30は胴部外面にタテハケ、内面にヨコハケを施す。31は胴部外面にタテハケ、内面にヨコハケを施す。32は胴部内外面にヨコハケを施す。

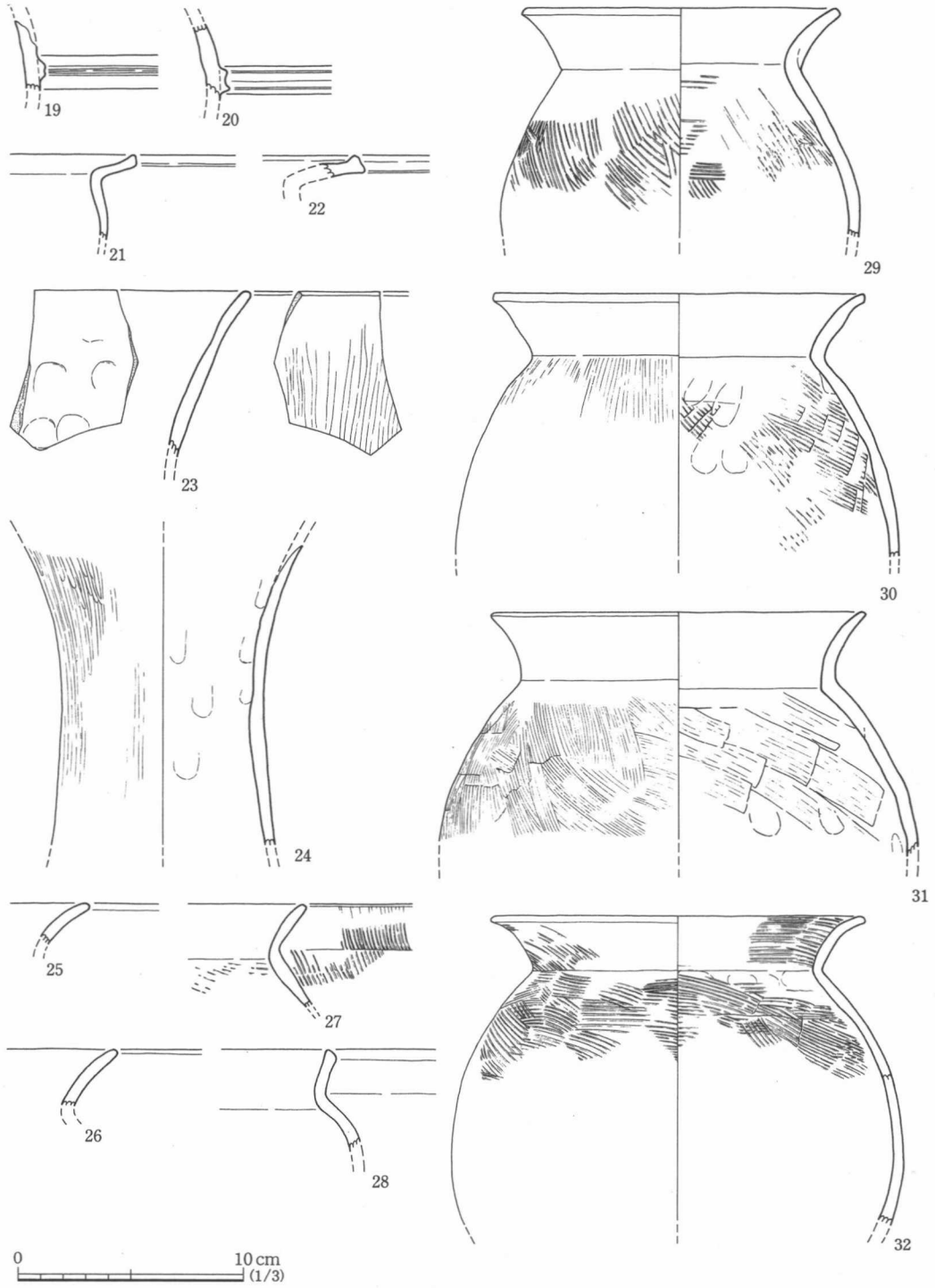


Fig.27 河川1 攪乱溝出土遺物実測図①

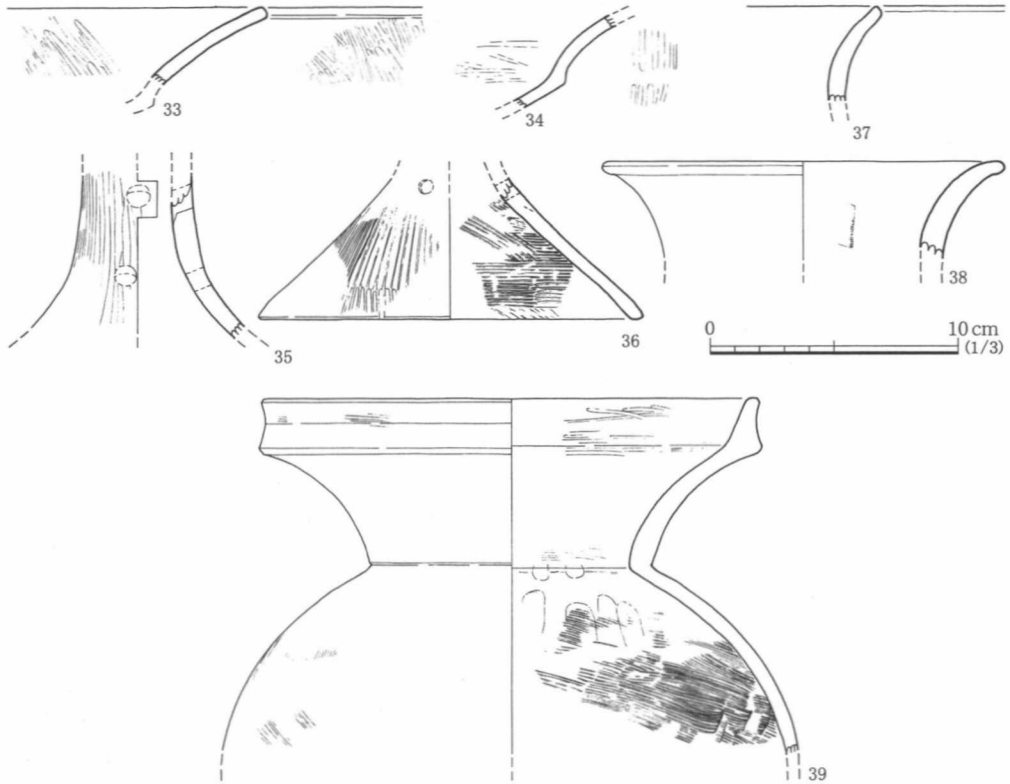


Fig.28 河川1 攪乱溝出土遺物実測図②

33・34は弥生時代後期の高坏坏部である。内外面にミガキを施す。35は高坏の脚部である。上下2段の透かし孔が認められ、四方透かしと考えられる。36は高坏の裾部である。透かし孔が1ヶ所残存する。外面にタテミガキ、内面にヨコハケを施す。37・38は土師器直口壺の口縁部である。39は類例が少ないが、在地系の複合口縁壺の最終形態と考えられる。口縁部の立ち上がりは短く、緩やかに外反する。胴部は球形で、頸部には浅い段を持つ。胴部外面は被熱している。内面にはヨコハケを施す。40～46は山陰系の甕である。45以外は屈曲部がヨコナデによって鋭く突出する。40～43は胴部上半が残存し、口縁部内外面にヨコナデ、胴部外面にヨコハケ、内面にケズリを施す。外面には部分的に煤が付着する。47・48は弥生時代終末～古墳時代初頭のタタキ甕で、外面には煤が付着する。47は口唇部に1条の沈線を施す。胴部外面には1条2mm、1cm/3本のタタキを施す。48は1条2mm、1cm/4本のタタキを施す。49は土師器壺の底部である。底部は上底で、外面にはナデを施す。内面には煤が付着する。50・51は弥生時代後期～古墳時代初頭の在地

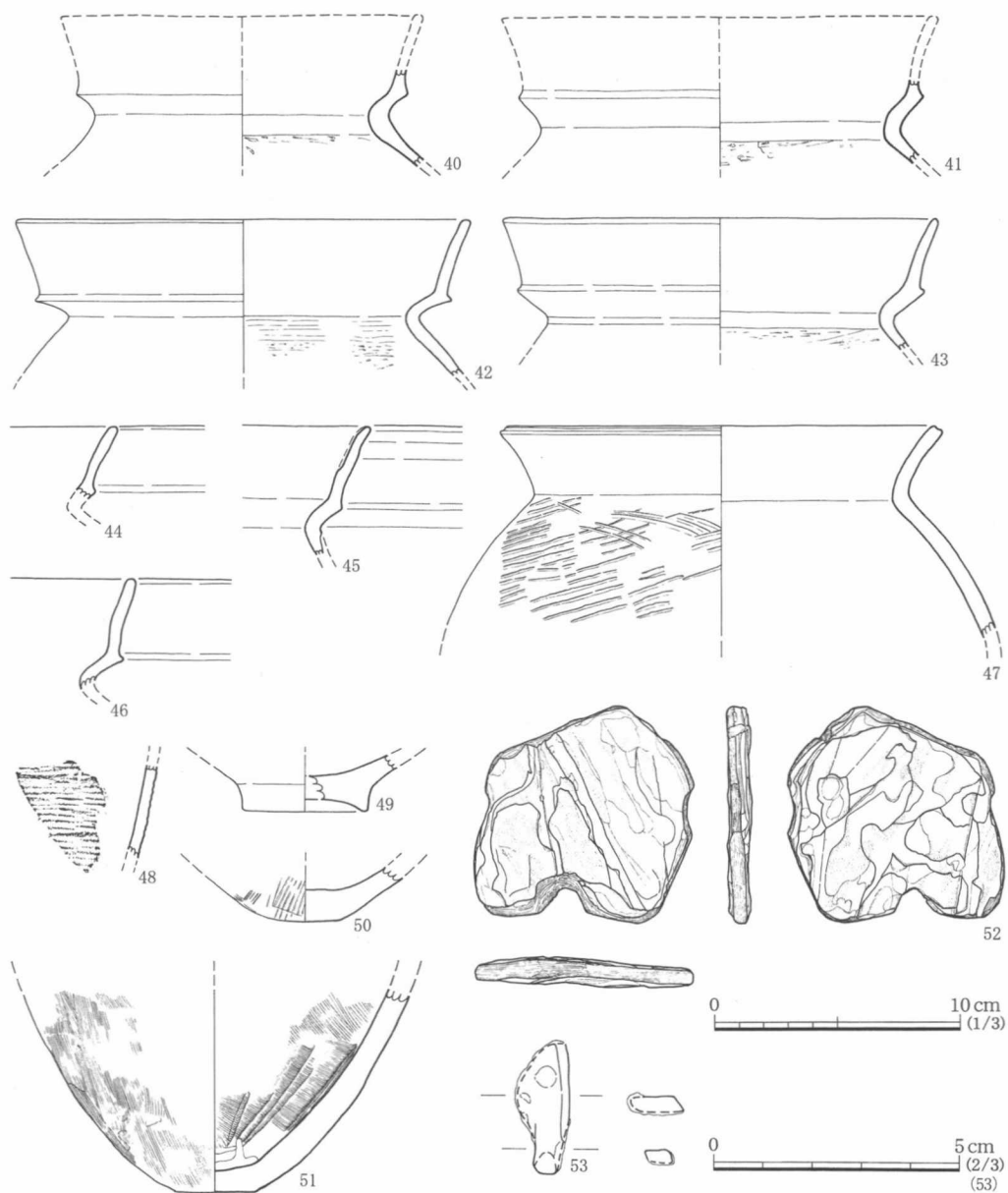


Fig.29 河川1 攪乱溝出土遺物実測図③

系甕の底部である。いずれも小さな平底で、外面にタテハケを施す。50は内面が風化しており、51はヨコハケを施す。52は石錘である。左右の抉りは浅いが、摩耗している。下部にも抉りを1ヶ所持つ。石質は結晶片岩である。53は用途不明鉄製品である。最大長2.7cm、最大幅1.15cm、最大厚0.33cmで、先端は欠損していると考えられる。(田畑)

(5) 小結

今回の調査の成果は、河川1の検出により、平成6年度実施のグランド屋外照明施設新設に伴う発掘調査Aトレンチで、北肩しか検出していなかった河川の規模をほぼ確定することができたこと、調査区を南北に長細く設定したことで、周辺の地山堆積状況や遺構の分布状況、さらには本学統合移転時造成による削平の状況を広範に確認できたことである。

地山の土層堆積については、従来吉田遺跡での遺構検出面となっている黄灰色あるいは青灰色シルトが広範に所在することを確認した。ただし、調査区の南西端周辺ではやや状況を異にすることがあわせて明らかとなった。

B調査区南西寄りで見られる第Ⅲ'層：暗灰色砂は河川堆積土である。B調査区ではns=89~94.5mで河川3を検出しているが、この河川は、ns=89m付近を北東側の肩として、南西方向に長大な河幅をとる、更に大きな河川の一時的流路と考えられる。この大河川による大規模な堆積作用は、第Ⅲ層：黄灰色・青灰色シルトと同様に吉田地区における地山形成作用の一つと位置付けられよう。この大河川の堆積作用によって、ns=90m付近から南西方向にかけては、第Ⅲ'層のような砂質土または砂礫土が地山を形成することになるのである。先後関係では第Ⅲ層に遅れる堆積と考えられる。B調査区の南西端で第Ⅲ'層以下65cmまで掘り下げて確認した土層では、第Ⅲ'層：暗黄灰色砂礫土、第Ⅳ'層：赤褐色粗礫、第Ⅴ層：黄赤褐色砂礫、第Ⅵ層：黒褐色礫であった。第Ⅳ'層は直径6cm程度、第Ⅵ層は直径3cm程度の礫層でいずれも酸化鉄分が強く付着しており、現在も伏流水があるらしく激しい湧水がみられた。昭和42年度に吉田遺跡調査団により行われた第Ⅲ地区南区の発掘調査では、やはり大きな河川が検出されている。調査区の位置関係が明確ではないため不確定の要素を残すが、今回の調査で検出した河川3及びns=90m付近から南西方向にかけての大河川は、昭和42年度調査の河川と同一のものである可能性が高いといえよう。

今回の調査では、各種の遺構を検出することができたが、遺構密度はそれほど濃厚とは言えない。その一因には、統合移転時造成による法面形成により、多くの遺構が消滅している可能性が考えられる。逆に、今回の調査地点より約1.5mほど高所に位置する野球場側では、遺構の残存状況が良好であることを推定できる。

河川1の調査では、遺構北西側の既設排水側溝南東側に沿った攪乱が大規模であることが判明した。そこで、外灯配線の管路をこの攪乱部分に埋設するように工事計画を策定することで、埋蔵文化財への影響を最小限におさえることができると考えられた。関連部局との協議によりこの工法が採択されるに至ったことを付記しておく。 (村田)

Tab.3 出土遺物観察表(土器)

法量()は復元値

遺物番号	出土遺構	層位	器種	部位	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	色調		胎土	備考
								①外面	②内面		
1	河川3	3層	縄文土器 深鉢	胴部				①灰黄色 ②黄灰色	1~3mmの砂粒を含む	巻貝による擬縄文 縄文LR 天地逆の可能性あり	
2	河川3	3層	縄文土器 深鉢	胴部				黒褐色	1~5mmの砂粒を含む	内外面に巻貝条痕	
3	河川3	3層	縄文土器 深鉢	胴部				にぶい黄橙色	1~3mmの砂粒を含む	外面に二枚貝条痕	
4	河川3	3層	縄文土器 深鉢	胴部				灰黄褐色	1~3mmの砂粒を含む	内外面に二枚貝条痕	
5	河川3	3層	縄文土器 深鉢	胴部				①暗灰黄色 ②黒褐色	1~3mmの砂粒を含む	内外面に二枚貝条痕	
6	河川3	3層	縄文土器 深鉢	胴部				①灰色 ②暗灰黄色	1~3mmの砂粒を含む	内外面に二枚貝条痕	
7	河川3	3層	縄文土器 深鉢	底部				灰黄褐色	1~5mmの砂粒を含む		
8	河川3	2層	縄文土器 浅鉢	底部				①にぶい黄色 ②黄灰色	1~3mmの砂粒を含む	風化が激しい	
9	河川3	1層	弥生土器 甕	胴部				①灰黄色 ②黄灰色	1~3mmの砂粒を含む		
11	河川1	1層	縄文土器 浅鉢	口縁部				にぶい黄橙色	1~3mmの砂粒を含む	風化が激しい	
12	河川1	1層	弥生土器 壺	胴部				①赤色 ②灰白色	1~3mmの砂粒を含む	外面に丹塗り磨研を施す	
13	河川1	床面清掃時	弥生土器 壺	胴部				①淡黄色 ②黄灰色	1~5mmの砂粒を含む		
14	河川1	1層	弥生土器 甕	口縁部 ~胴部				①黒褐色 ②にぶい黄橙色	1~5mmの砂粒を含む		
15	河川1	1層	土師器 甕	胴部				灰白色	1~3mmの砂粒を含む		
16	河川1	清掃時	土師器 壺	口縁部	(13.0)			灰黄色	1~3mmの砂粒を含む		
17	河川1	清掃時	土師器 壺	口縁部 ~胴部	(9.0)			①にぶい黄橙色 ②浅黄橙色	1~3mmの砂粒を含む		
18	河川1	1層	土師器 壺	底部		5.1		①にぶい黄橙色 ②浅黄橙色	1~3mmの砂粒を含む		
19	河川1	攪乱溝	弥生土器 壺	胴部				灰黄色	1mmの砂粒を含む	北部九州系	
20	河川1	攪乱溝	弥生土器 壺	胴部				灰白色	1~3mmの砂粒を含む	北部九州系	
21	河川1	攪乱溝	弥生土器 甕	口縁部				にぶい黄橙色	1~3mmの砂粒を含む		
22	河川1	攪乱溝	弥生土器 甕	口縁部				灰白色	1~3mmの砂粒を含む		
23	河川1	攪乱溝	弥生土器 器台	口縁部				にぶい黄橙色	1~3mmの砂粒を含む	24と同一	
24	河川1	攪乱溝	弥生土器 器台	胴部				にぶい黄橙色	1~3mmの砂粒を含む	23と同一	
25	河川1	攪乱溝	弥生~ 土師器 甕	口縁部				にぶい黄橙色	1~3mmの砂粒を含む		
26	河川1	攪乱溝	弥生~ 土師器 甕	口縁部				①黒色 ②にぶい黄褐色	1~3mmの砂粒を含む	外面に煤附着	
27	河川1	攪乱溝	弥生~ 土師器 甕	口縁部 ~胴部				①黒色 ②灰黄色	1~3mmの砂粒を含む	外面に煤附着	
28	河川1	攪乱溝	弥生土器 甕	口縁部 ~胴部				①褐灰色 ②灰黄褐色	1~3mmの砂粒を含む	外面に煤附着	
29	河川1	攪乱溝	弥生土器 甕	口縁部 ~胴部	(13.7)			にぶい黄橙色	1~3mmの砂粒を含む	外面に煤附着 風化が激しい	
30	河川1	攪乱溝	弥生~ 土師器 甕	口縁部 ~胴部	(16.4)			にぶい赤橙色	1~3mmの砂粒を含む	外面被熱 煤附着	
31	河川1	攪乱溝	弥生~ 土師器 甕	口縁部 ~胴部	(16.6)			浅黄色	1~3mmの砂粒を含む	外面に煤附着	
32	河川1	攪乱溝	弥生~ 土師器 甕	口縁部 ~胴部	(16.1)			灰黄色	1~3mmの砂粒を含む	外面被熱、煤附着	
33	河川1	攪乱溝	弥生土器 高坏	坏部				①にぶい黄橙色 ②褐灰色	1~3mmの砂粒を含む		
34	河川1	攪乱溝	弥生土器 高坏	坏部				①黄灰色 ②灰黄色	1~3mmの砂粒を含む		
35	河川1	攪乱溝	弥生土器 高坏	脚部				①にぶい橙色 ②橙色	1~3mmの砂粒を含む	円形透かし穴	
36	河川1	攪乱溝	弥生土器 高坏	裾部		(15.6)		①灰黄色 ②にぶい黄色	1~3mmの砂粒を含む	円形透かし穴	

平成8年度山口大学構内の試掘調査

法量()は復元値

遺物番号	出土遺構	層位	器種	部位	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	色調 ①外面②内面	胎土	備考
37	河川1	攪乱溝	土師器 壺	口縁部				灰白色	1~3mmの砂粒を含む	
38	河川1	攪乱溝	土師器 壺	口縁部	(16.2)			①にぶい黄橙色 ②明黄褐色	1~3mmの砂粒を含む	
39	河川1	攪乱溝	土師器 壺	口縁部 ~胴部	(20.0)			橙色	1~3mmの砂粒を含む	外面被熱 煤付着
40	河川1	攪乱溝	土師器 甕	口縁部 ~胴部				①にぶい黄橙色 ②にぶい橙色	1~3mmの砂粒を含む	山陰系 外面に煤付着
41	河川1	攪乱溝	土師器 甕	口縁部 ~胴部				にぶい黄橙色	1~3mmの砂粒を含む	山陰系 外面に煤付着
42	河川1	攪乱溝	土師器 甕	口縁部 ~胴部	(18.4)			にぶい黄橙色	1~3mmの砂粒を含む	山陰系 外面に煤付着 46と同一か
43	河川1	攪乱溝	土師器 甕	口縁部 ~胴部	(17.4)			明黄褐色	1~3mmの砂粒を含む	山陰系 外面に煤付着
44	河川1	攪乱溝	土師器 甕	口縁部				にぶい黄橙色	1~3mmの砂粒を含む	山陰系 外面に煤付着
45	河川1	攪乱溝	土師器 甕	口縁部				①にぶい黄橙色 ②褐灰色	1~3mmの砂粒を含む	山陰系
46	河川1	攪乱溝	土師器 甕	口縁部				にぶい黄橙色	1~3mmの砂粒を含む	山陰系 外面に煤付着 42と同一か
47	河川1	攪乱溝	弥生~ 土師器 甕	口縁部 ~胴部	(18.0)			橙色	1~5mmの砂粒を含む	外面被熱 煤付着 風化が激しい
48	河川1	攪乱溝	弥生~ 土師器 甕	胴部				①黒褐色 ②にぶい黄橙色	1~3mmの砂粒を含む	外面に煤付着
49	河川1	攪乱溝	土師器 壺	底部		(5.4)		①灰黄褐色 ②黒褐色	1~3mmの砂粒を含む	内面に煤付着
50	河川1	攪乱溝	弥生~ 土師器 甕	底部		(2.6)		①灰黄色 ②灰色	1~3mmの砂粒を含む	
51	河川1	攪乱溝	弥生土器 甕	底部		(3.4)		①にぶい黄橙色 ②灰黄褐色	1~5mmの砂粒を含む	外面に煤付着

Tab.4 出土遺物観察表(石器)

遺物番号	出土遺構	層位	器種	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	重量 (g)	石質	備考
10	河川3	3層	敲石	11.0	7.9	6.7	828.1	結晶片岩	欠損部を再調整の後、使用している
52	河川1	攪乱溝	石錘	8.9	8.85	1.09	124.8	結晶片岩	挟り部が摩耗している

Tab.5 出土遺物観察表(鉄製品)

法量()は現存値

遺物番号	出土遺構	層位	器種	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	重量 (g)	備考
53	河川1	攪乱溝	不明	(2.7)	1.15	0.33	1.0	先端が欠損している

3 吉田構内農学部附属農場排水管布設に伴う試掘調査

(1) 調査の経過

吉田構内の排水設備は敷設後30年以上経過しているため、平成8年8月山口市水道課の検査と指導が行われた。その結果、農学部附属農場の排水設備について補修が指示されたため、新たな排水管の布設工事が行われることとなった。調査区は、吉田地区への統合移転の際、第Ⅳ地区と呼ばれていた地区に相当する。調査区から東へ約20mの地点に位置する牛舎敷地では当時教育学部に在職していた小野忠熙氏らにより発掘調査が行われた。調査の結果、弥生時代の溝や土坑、古墳時代の堅穴住居などが検出され、弥生土器、土師器、須恵器、瓦器などが出土したとされている。その後、平成7年度に牛舎の新営に伴って発掘調査が行われたが、顕著な遺構・遺物は認められなかった。しかし、その他に調査データはなく、地下の状況については不明な点が多い。

以上の状況を踏まえ、埋蔵文化財資料館運営委員会は協議の結果、試掘調査が必要であると判断した。これを受け、埋蔵文化財資料館は平成9年2月18日から2月28日にかけて発掘調査を実施した。調査面積は約93㎡である。なお、調査区は牛舎から堆肥を常時排出する都合上、通路を確保する必要があるため、北調査区と南調査区に二分した。

(2) 基本層序 (Fig32 ~ 34, PL.16 (1) (3)・17(3))

調査区における基本層序は、次の順である。第Ⅰ層：バラス（表土）、第Ⅱ層：暗灰色、茶褐色、赤褐色粘質土を主とする大学統合移転時の造成土、第Ⅲ層：暗灰色、暗茶褐色粘質土（水田耕土）、第Ⅳ層：暗黄灰色、暗黄灰色粘質土を主とする水田床土、第Ⅴ層：暗黄赤茶褐色・暗茶褐色粘質土を主とする遺物包含層、第Ⅵ層：黄茶褐色、灰黄色、黄茶色粘質土（地山）、第Ⅶ層：岩盤風化土である橙黄褐色、黄灰青色粘質土（地山）、第Ⅷ層：黄青灰色岩盤（地山）

第Ⅰ層は調査直前までのバラス敷の路面に係わるもので、第Ⅱ層は統合移転時の造成土である。

北調査区では第Ⅱ層が約150cmと厚く、その直下が第Ⅵ層の地山となり、包含層や



Fig.30 調査区位置図

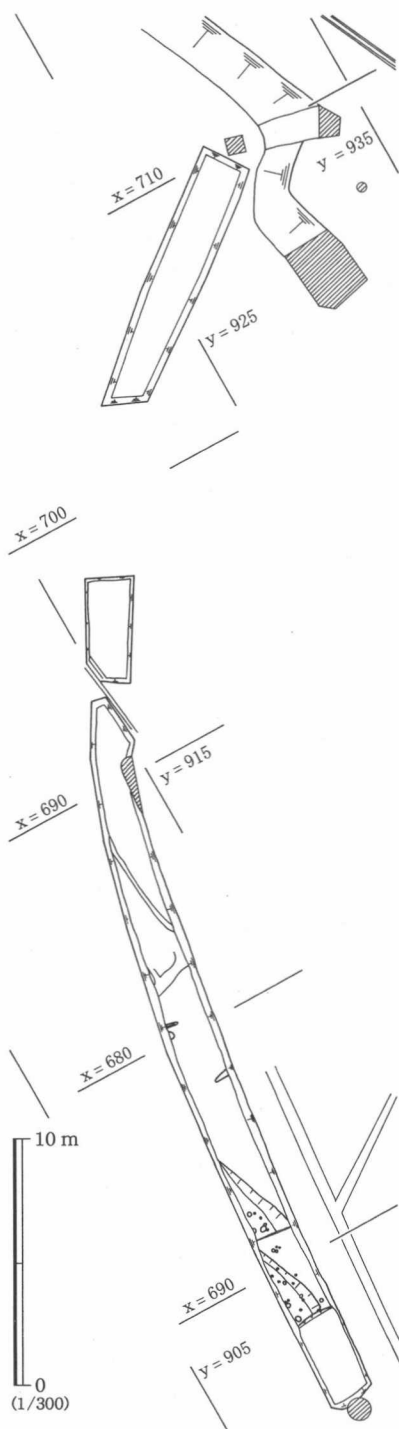


Fig.31 調査区設定位置図

遺構は検出できなかった。

南調査区でも $x = 689\text{m}$ 付近まで厚さ約20cmの第I層の直下で第VII層を検出しており、統合移転時の削平が激しさがうかがえる。 $x = 689\text{m}$ 付近より南では、第I層の直下が、厚さ約10~20cmの第II層、水田層である第III層・IV層、地山である第VI層の順となる。第III層は厚さ約10~25cmで、削平により部分的に残存しているにすぎない。第IV層は厚さ約5~25cmである。 $x = 680\text{m}$ 付近から南においては、第VI層が西側へ緩やかに落ち込んでおり、第V層が厚さ約5~30cm堆積していた。第V層は土師器、須恵器のほか、磨滅した土師器碗と皿の小片を含んでおり、古墳時代後期から中世までの時期幅を持つ。

(3) 遺構 (Fig.32・33, PL.16 (2)・17 (1) (2))

南調査区では、地山を検出面として $x = 678 \sim 690\text{m}$ 付近で統合移転前の水田に伴う水田暗渠・溝を検出した。また、 $x = 668 \sim 673\text{m}$ 付近では、第VI層を検出面として、古墳時代~中世の柱穴とピット群を検出した。ピットの直径は3~10cmで、調査区が狭いため明確な規則性はみいだせなかったが、柵列の可能性はある。深さは西側の壁面沿いのもので約40cm、その他が約15cmで、埋土はいずれも黒褐色粘質土であった。時期については、遺物がほとんど出土していないため明確でないが、上を第V層に覆われていること、埋土の色調から中世以前と考えられる。

(4) 遺物 (Fig.35, PL.17 (4))

第V層から古墳時代後期~中世の土器が少量出土した。1は提瓶の胴部である。外面にカキメを施す。内面には回転ナデを施す。2は須恵器高杯の坏部で

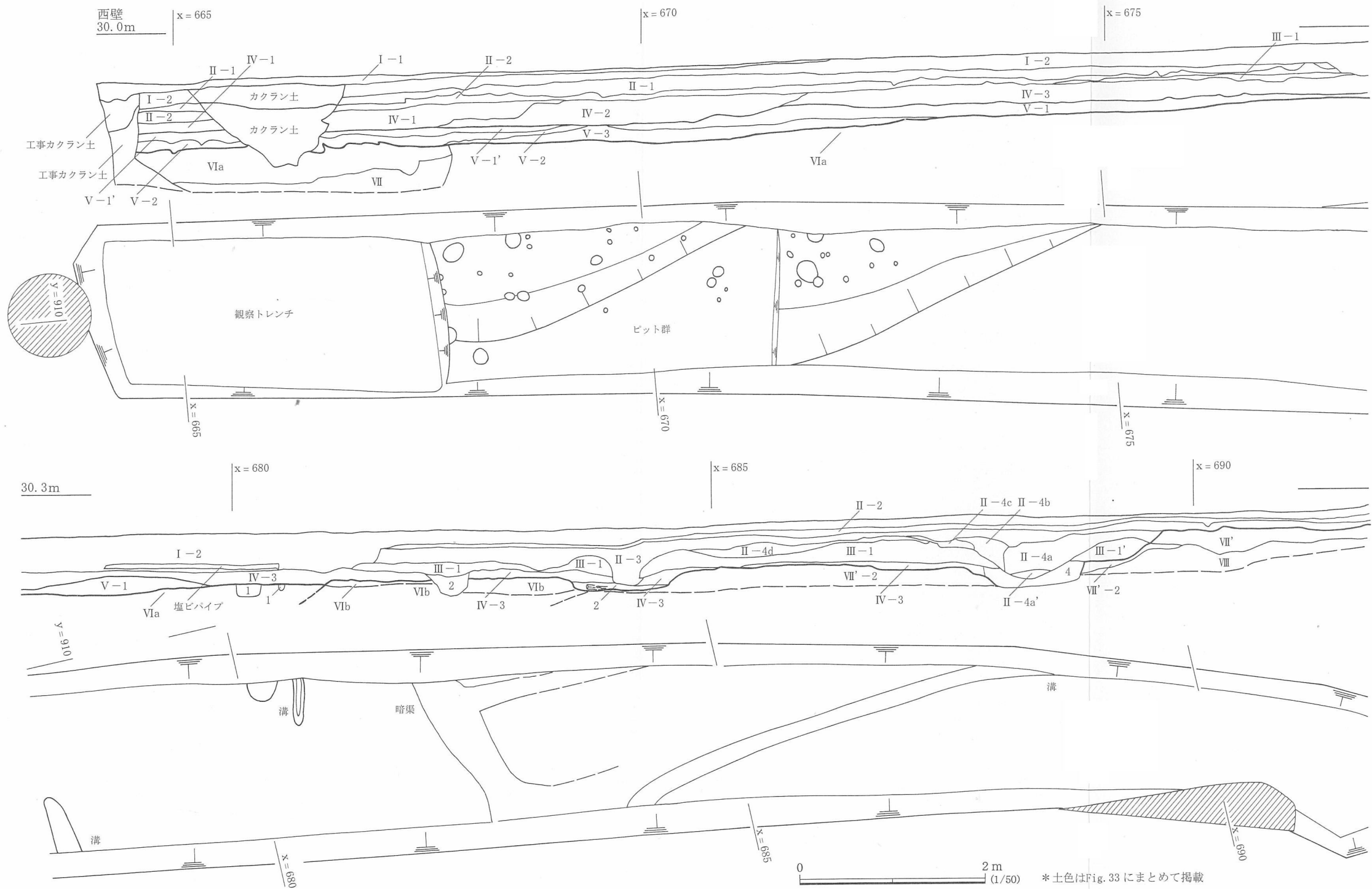
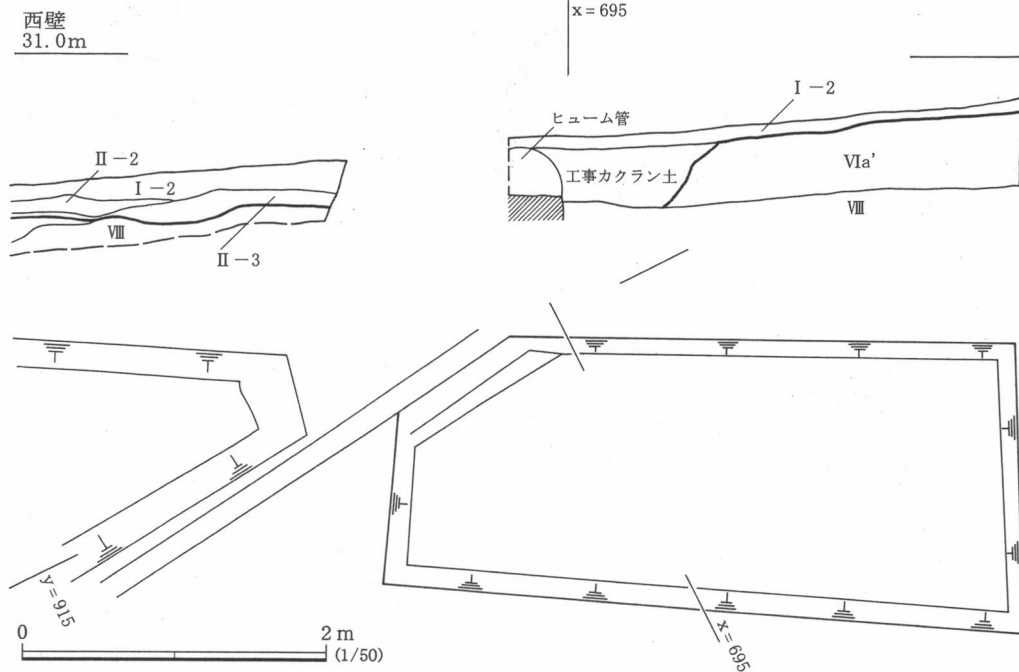


Fig.32 南調査区遺構配置図・西壁土層断面図①

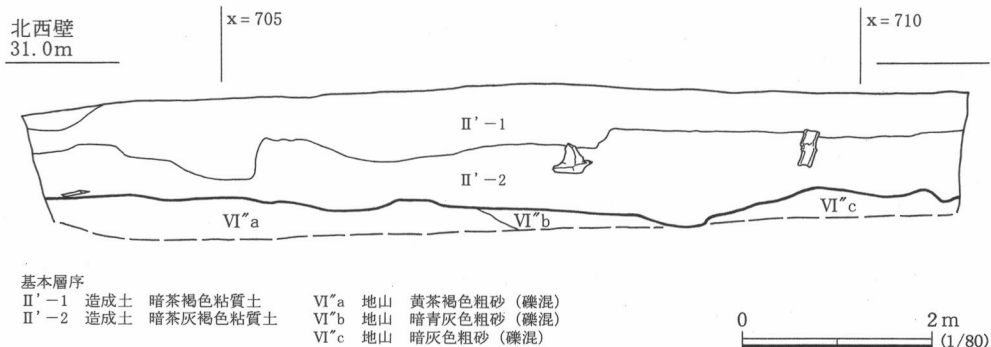
吉田構内の試掘調査



基本層序

I-1	表土	バラス (径2~3cm程度)	IV-1	水田床土	暗黄灰色粘質土 (黒褐色粘質土ブロック混)	VII	地山	橙黄褐色粘質土 (岩盤風化土)
I-2	表土	バラス (径5cm程度)	IV-2	水田床土	暗黄灰色粘質土	VII'-1	地山	黄灰青色粘質土 (岩盤風化土)
II-1	造成土	暗灰色・黒褐色粘質土 (混層)	IV-3	水田床土	暗黄茶褐色粘質土	VII'-2	地山	黄灰青色粘質土 (岩盤風化土)
II-2	造成土	赤褐色粘質土	IV-3'	水田床土	黄灰青色粘質土	VIII	地山	黄青灰岩盤
II-3	造成土	黒褐色粘質土 (暗黄褐色粘質土ブロック混)	V-1	包含層	暗黄赤茶褐色粘質土	遺構埋土		
II-4a	造成土	暗灰色粘質土	V-1'	包含層	暗茶褐色粘質土	1	溝埋土	灰黄色粘質土
II-4a'	造成土	茶褐色粘質土	V-2	包含層	黒褐色粘質土	2	暗渠埋土	暗灰色粘質土
II-4b	造成土	茶褐色粘質土	V-3	包含層	暗黄茶褐色粘質土	3	埋土	茶褐色粘質土
II-4c	造成土	暗灰色粘質土	VIa	地山	黄茶褐色粘質土	4	溝埋土	黒灰色粘質土
II-4d	造成土	暗黄灰色粘質土	VIb	地山	灰黄色粘質土			
III-1	水田耕土	暗灰色粘質土	VIa'	地山	黄茶色粘質土 (石英円礫混)			
III-1'	水田耕土	暗茶褐色粘質土						

Fig.33 南調査区遺構配置図・西壁層断面図②



基本層序

II'-1	造成土	暗茶褐色粘質土	VI'a	地山	黄茶褐色粗砂 (礫混)
II'-2	造成土	暗茶灰褐色粘質土	VI'b	地山	暗青灰色粗砂 (礫混)
			VI'c	地山	暗灰色粗砂 (礫混)

Fig.34 北調査区北西壁層断面図

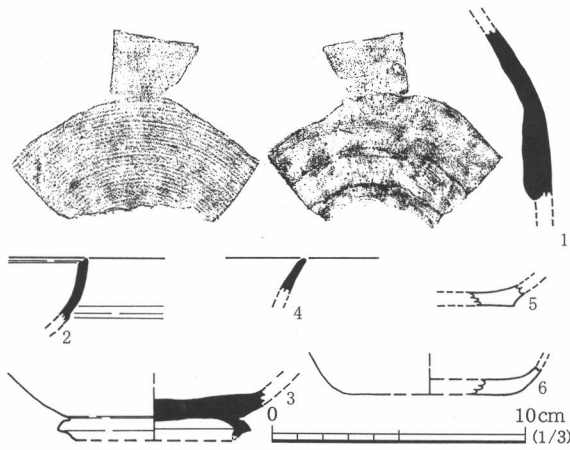


Fig.35 第V層出土遺物実測図

ある。外面に1条沈線を施す。3は須恵器坏の底部である。接地面を欠損する。5は土師器埴の底部である。底部外面は糸切りである。風化が激しい。6は土師器皿の底部である。底部は糸切りである。風化が激しい。

(5) 小結

今回の試掘調査の結果、北調査区では、統合移転時の造成による削平が激しく、遺構・遺物は検出できなかったが、南調査区で古墳時代後期～中世の

遺物包含層とピット群を検出した。これらは統合移転前の水田造成によって、少なからず削平を受けていると考えられる。また、調査面積が狭いため、詳細については、明らかにすることができなかった。しかし、今回の調査によって、牛舎から調査地付近まで、遺構・遺物が存在する可能性が高まった。統合移転前の水田及び統合移転時の造成による消失の程度は不明であるが、今後の調査が待たれる。また、調査地と貯水池を挟んだ西側の、通称「もり山」の斜面には横穴墓が存在するといわれており、²⁾ 関連が注目されよう。

(田畑)

[注]

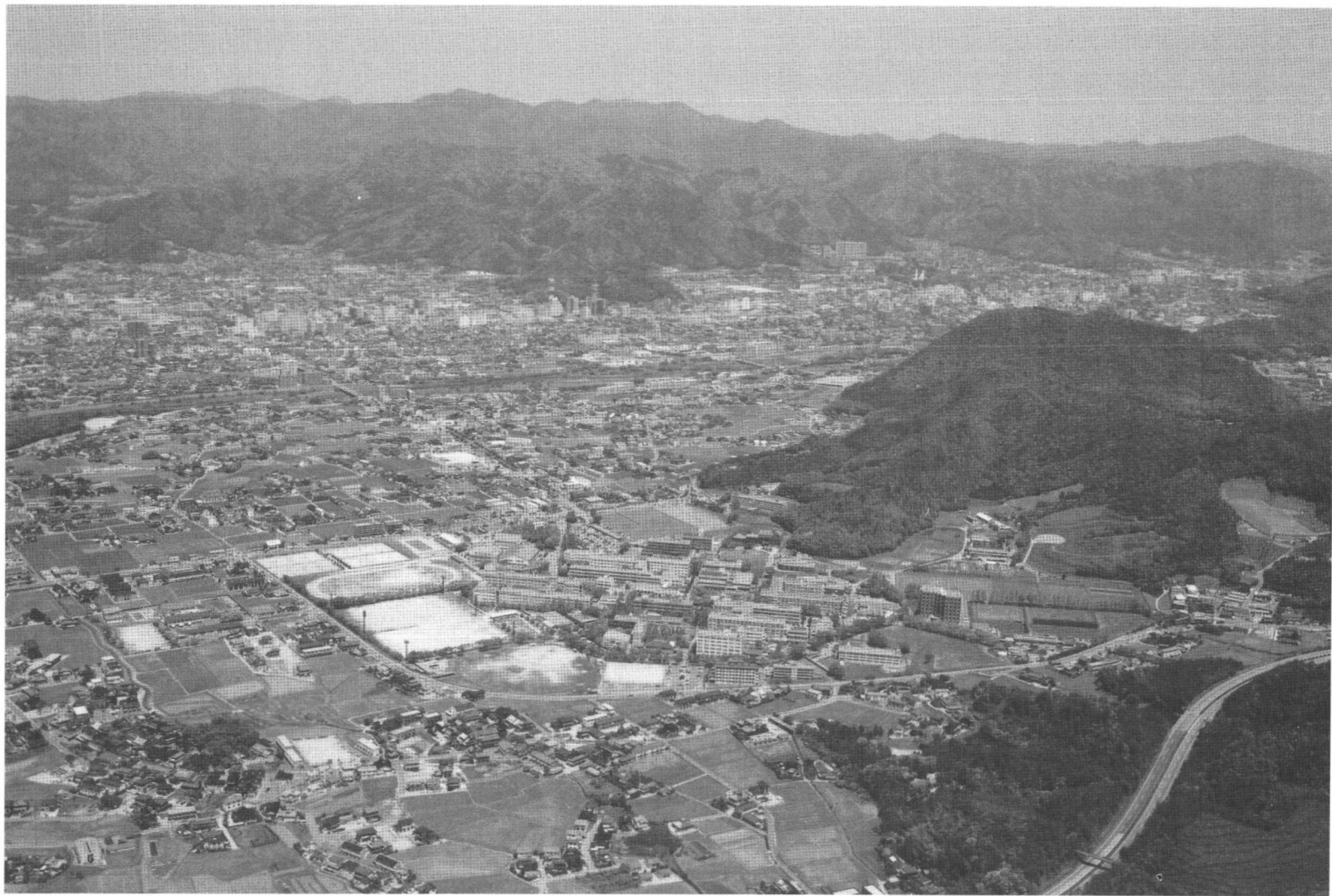
- 1) 山口大学吉田遺跡調査団『山口大学構内吉田遺跡発掘調査概報』(山口大学、1976年)
- 2) 石川卓美『平川文化散歩』(山口市平川公民館、1972年)

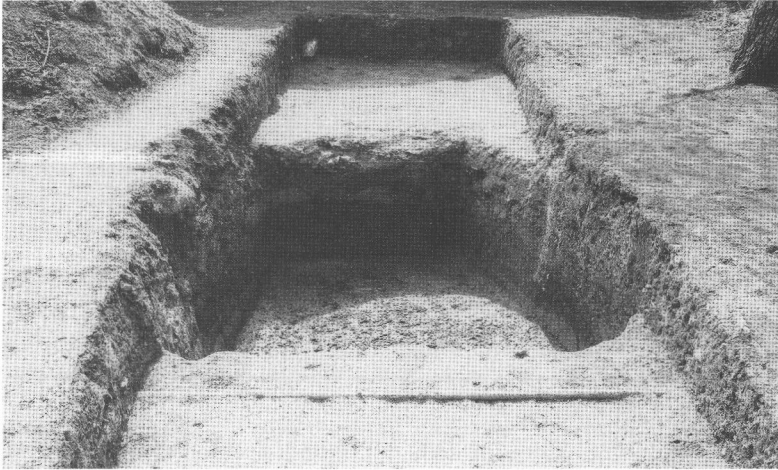
Tab.6 出土遺物観察表(土器)

法量()は復元値

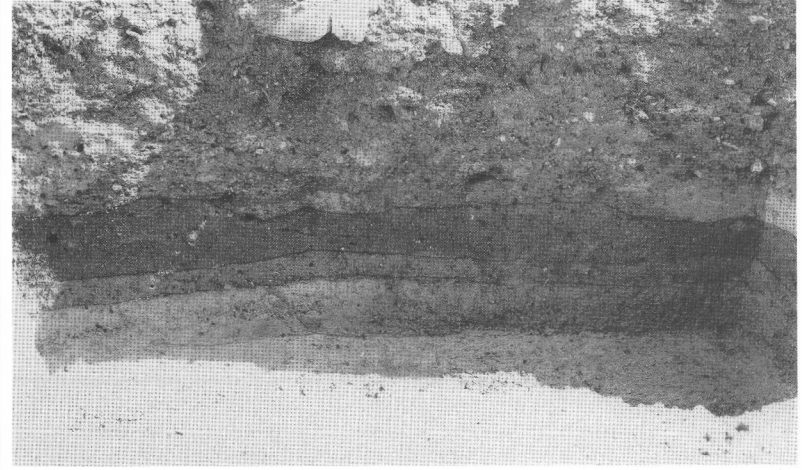
遺物番号	出土遺構	層位	器種	部位	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	色調		胎土	備考
								①外面	②内面		
1	南調査区	V-3層	須恵器 提瓶	胴部				①灰オリーブ色 ②青灰色	1~2mmの砂粒を含む		
2	南調査区	V-1層	須恵器 高坏	坏部				灰色	微砂粒をわずかに含む		
3	南調査区	V-1層	須恵器 坏身	底部		(6.2)		明青灰色	微砂粒をわずかに含む		
4	南調査区	V-1層	須恵器 坏身	口縁部				明青灰色	1~2mmの砂粒を含む		
5	南調査区	V-1層	土師器 埴	底部				①黒褐色 ②褐灰色	1~2mmの砂粒を含む	底部糸切り	
6	南調査区	V-1層	土師器 皿	底部		(6.4)		にぶい黄橙色	1~3mmの砂粒を含む	底部糸切り	

吉田構内全景（南から）

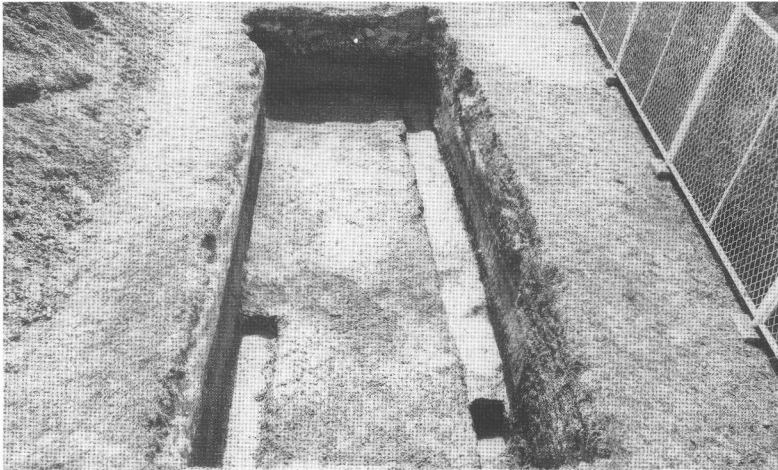




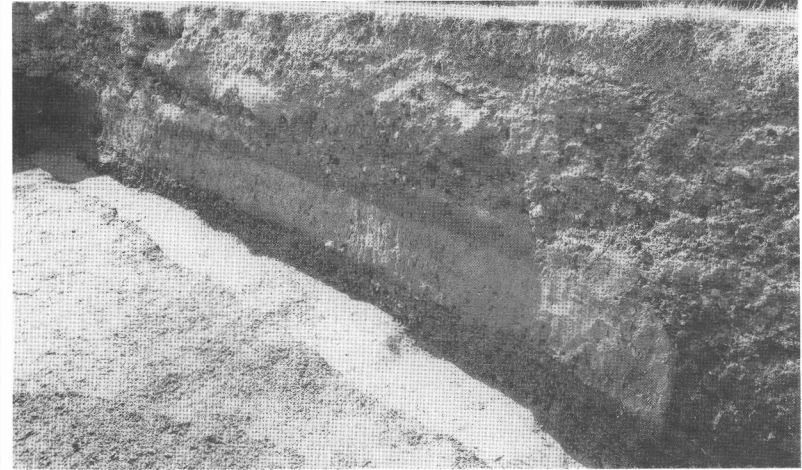
(1) 独身宿舎調査区全景（北から）



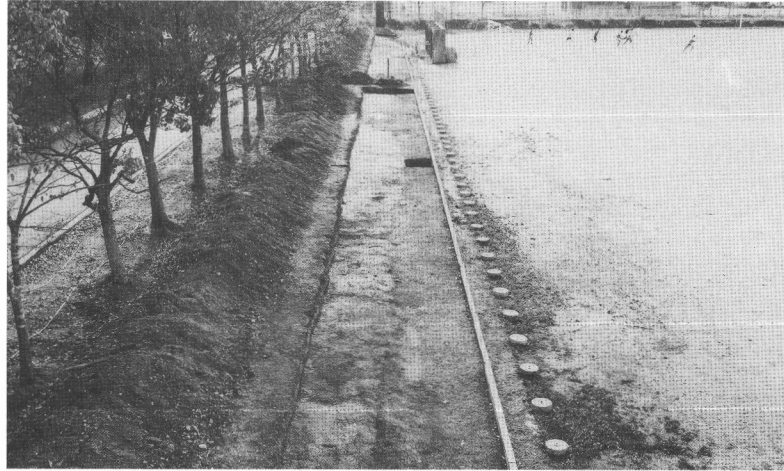
(2) 独身宿舎調査区東壁土層断面（西から）



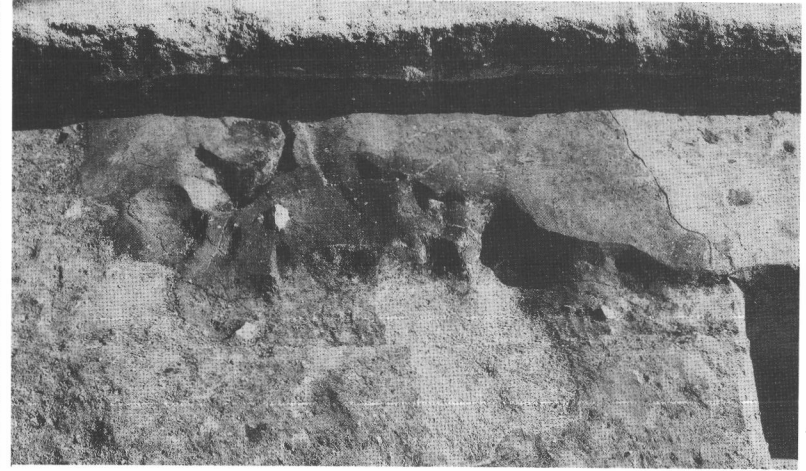
(3) 国際交流会館調査区全景（北から）



(4) 国際交流会館調査区西壁土層断面（北東から）



(1) 調査区全景 (北東から)



(2) 河川1 検出状況 (北西から)

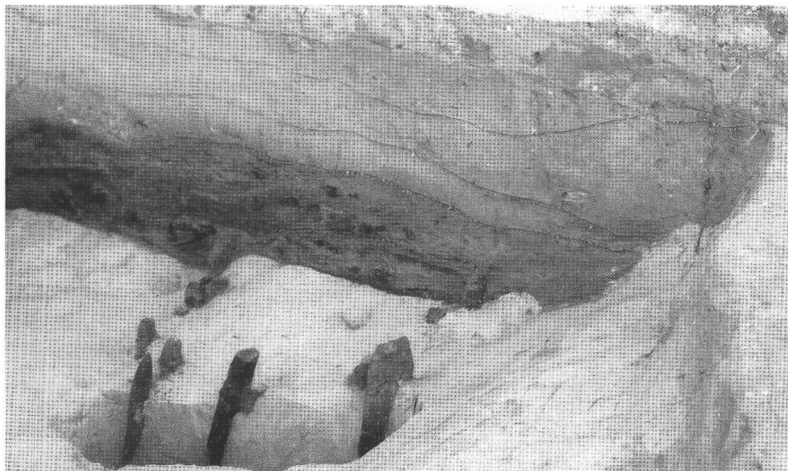


(3) 河川1 流木検出状況 (北西から)

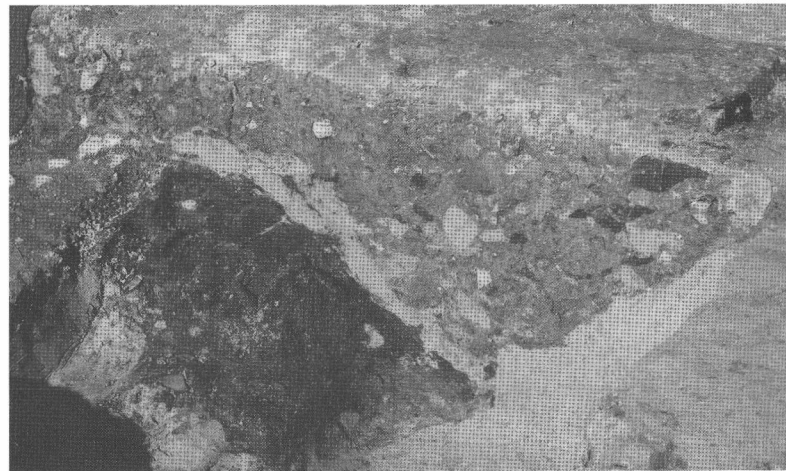


(4) 河川1 発掘状況 (西から)

吉田構内基幹環境整備 (外灯新設) に伴う試掘調査 一



(1) 河川1土層断面・木杭断ち割り状況(南東壁部分・西から)



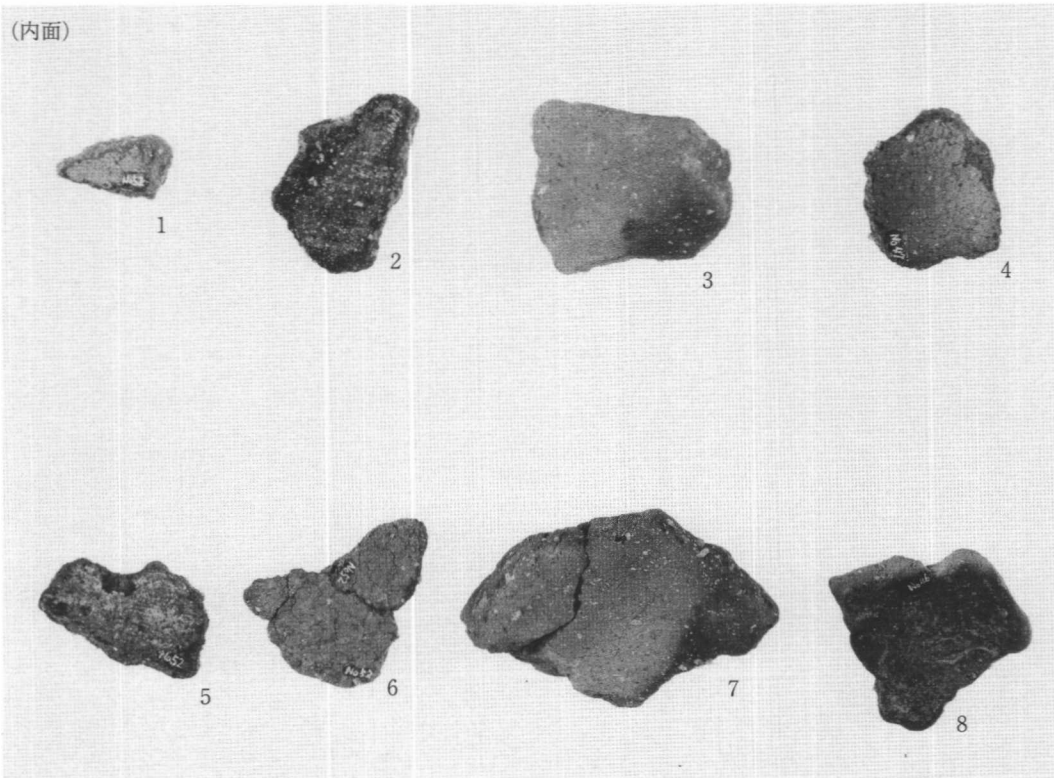
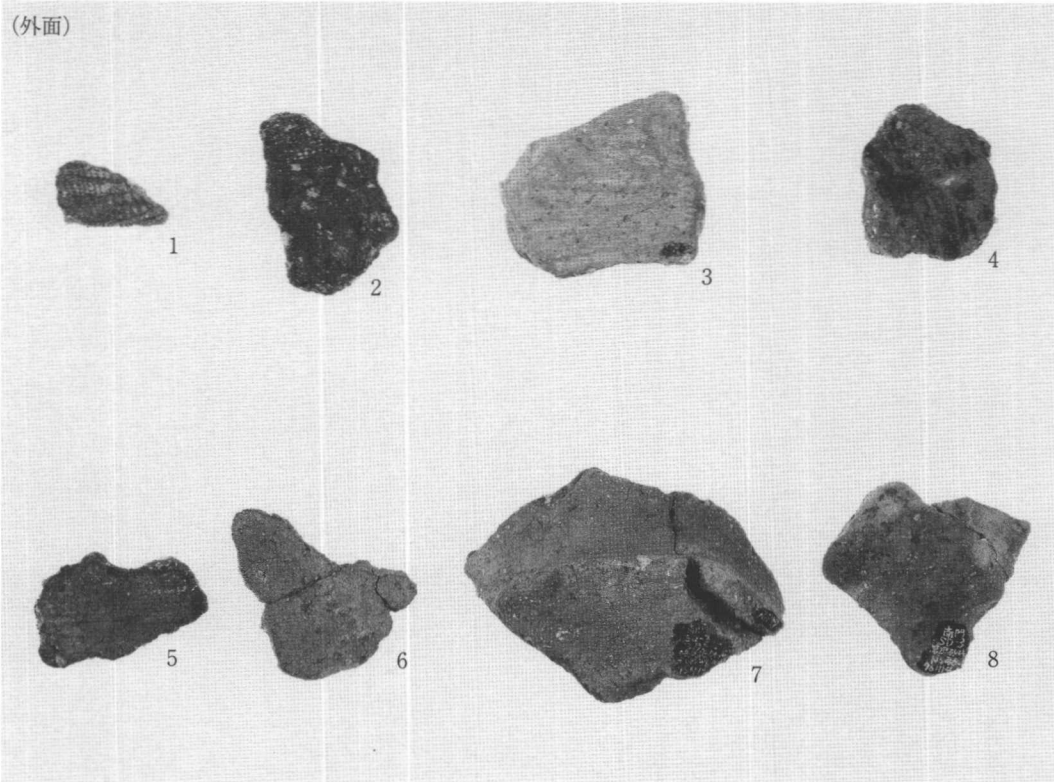
(2) 河川1北東-南西方向攪乱土層(南から)



(3) 河川2土層断面(南東壁部分・西から)

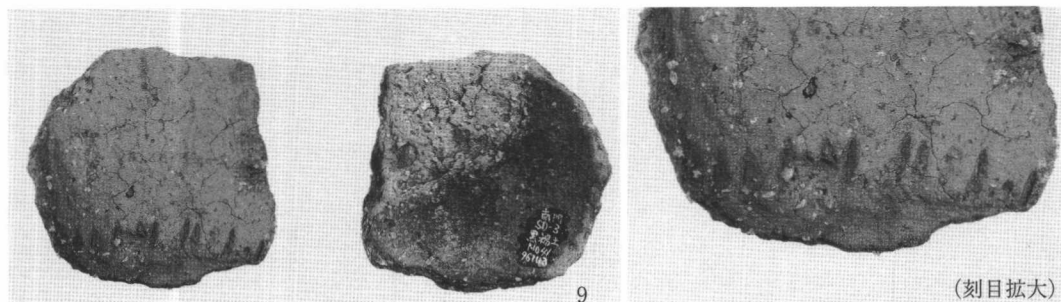


(4) 河川3土層断面(南東壁部分・西から)



河川3出土縄文土器

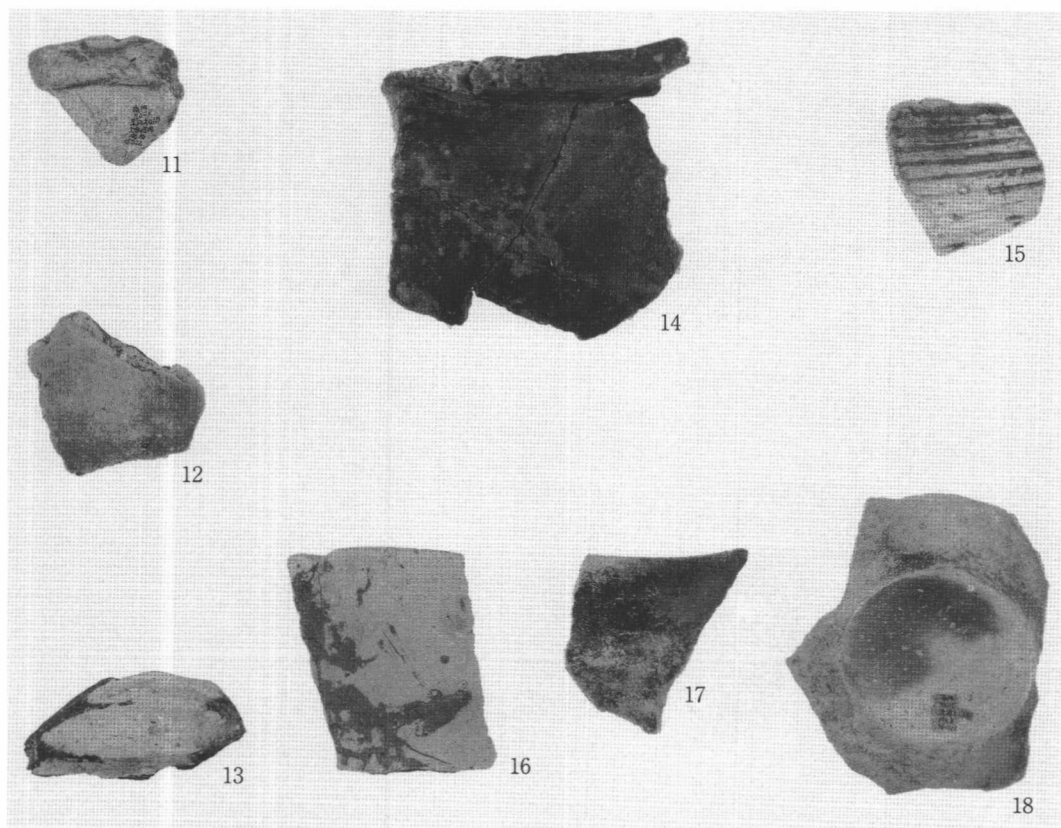
吉田構内基幹環境整備
(外灯新設)に伴う試掘調査
四



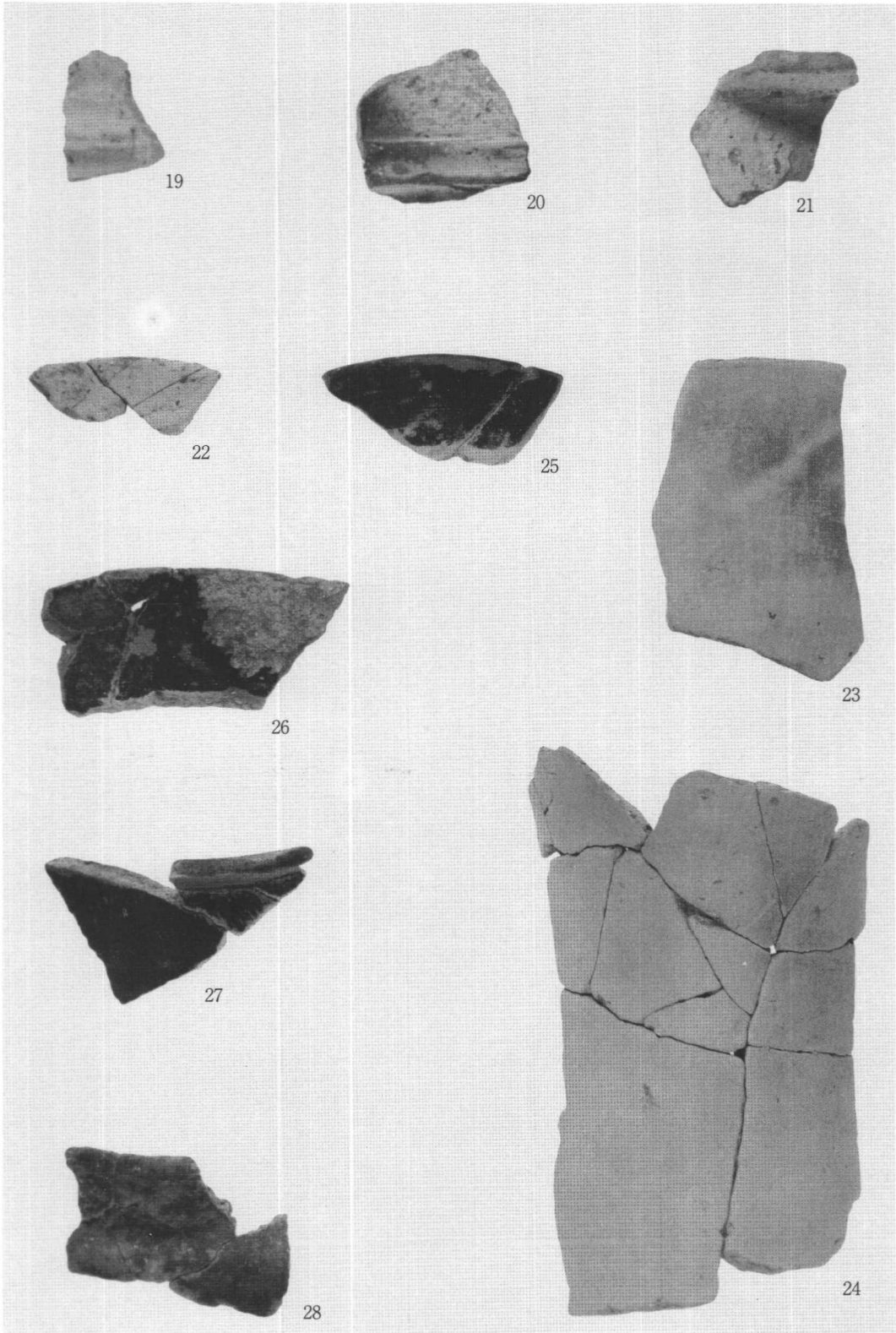
(1) 河川3出土弥生土器



(2) 河川3出土敲石

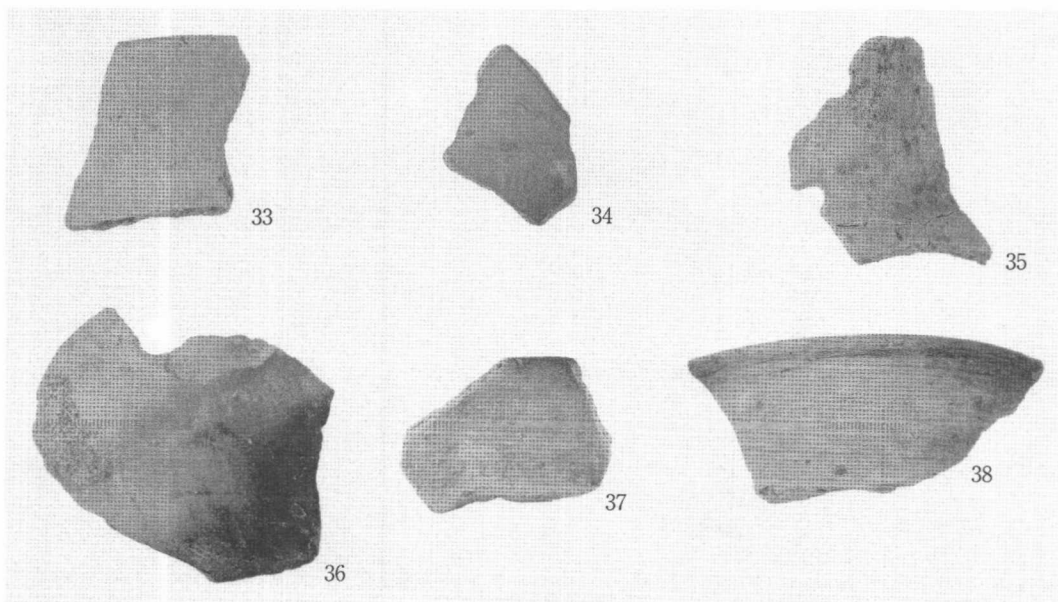
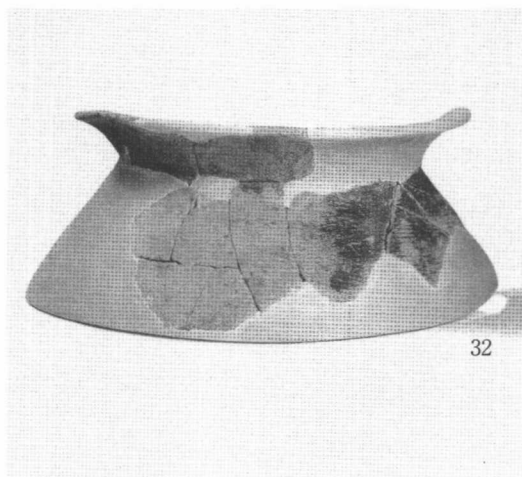
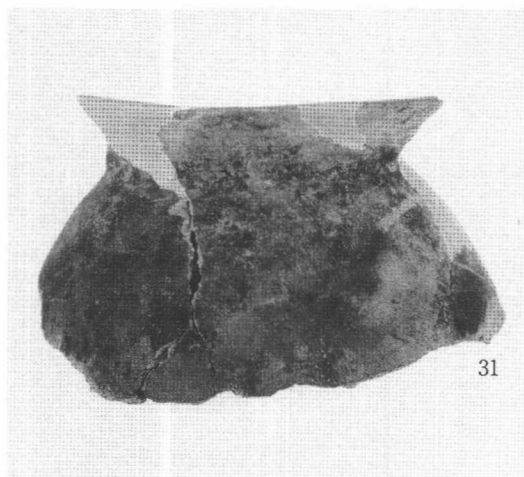
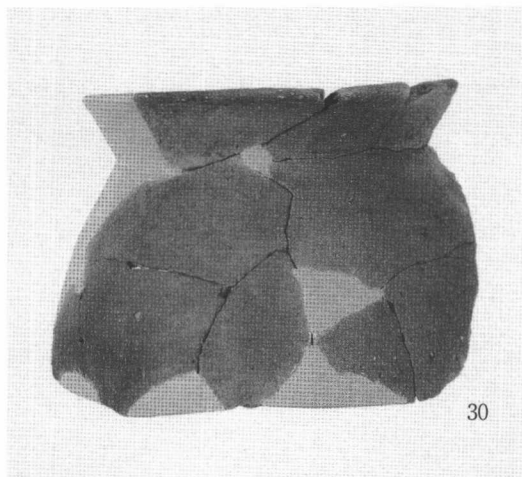
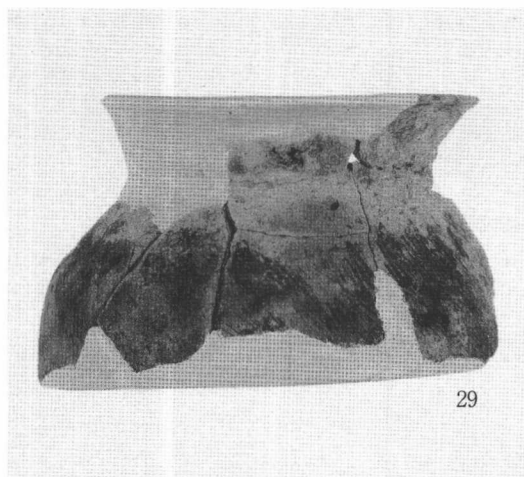


(3) 河川1出土遺物

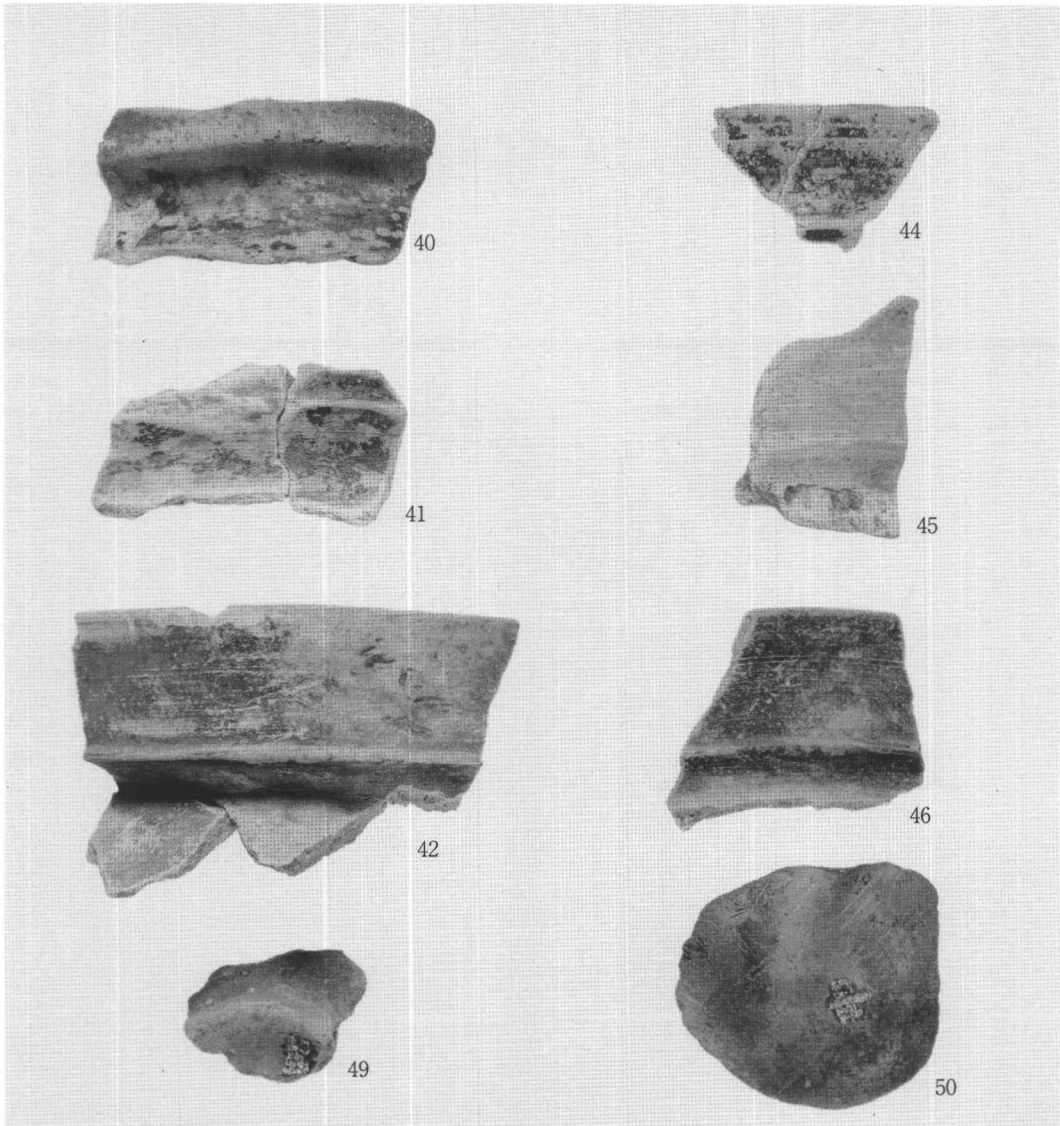
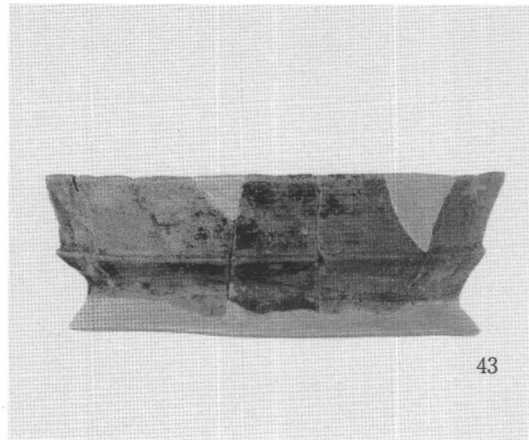
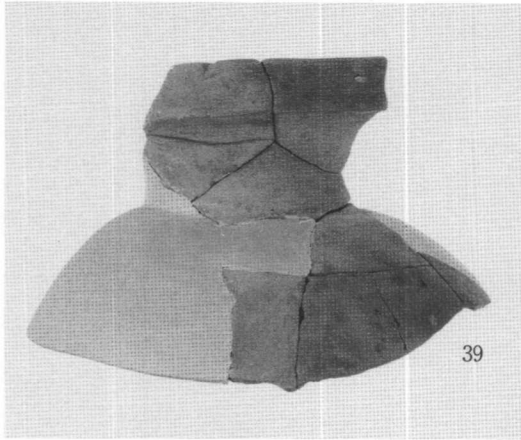


河川1 攪乱溝出土遺物①

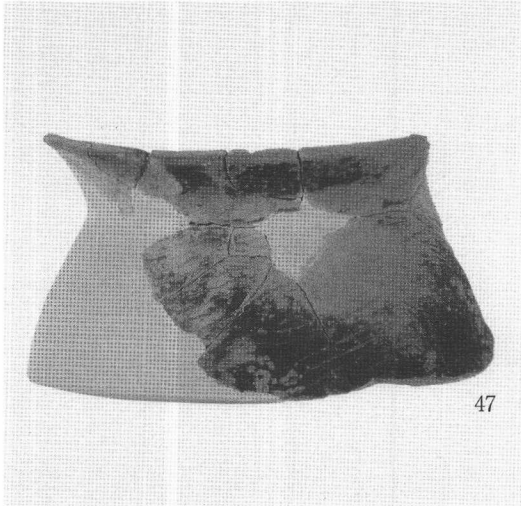
吉田構内基幹環境整備（外灯新設）に伴う試掘調査 六



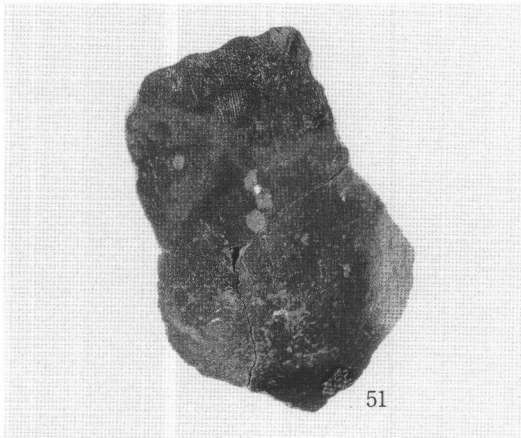
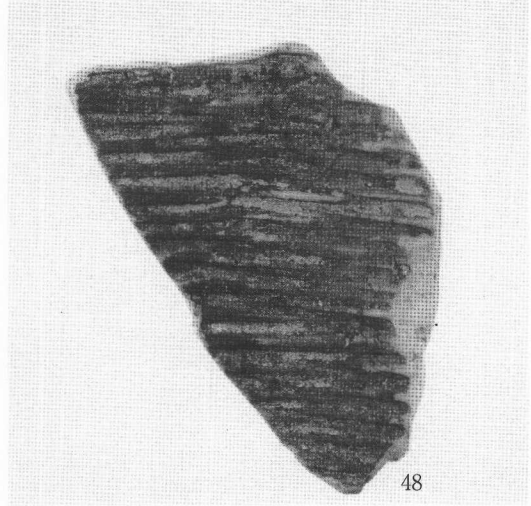
河川1 攪乱溝出土遺物②



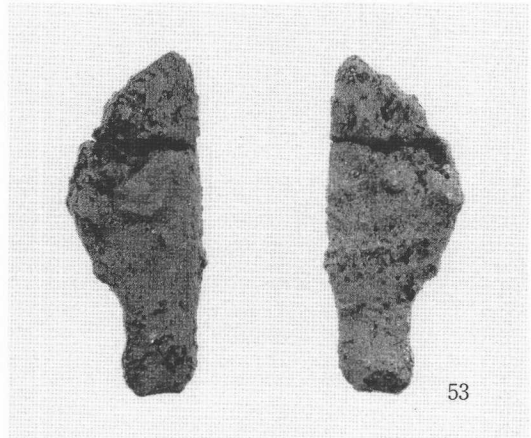
河川1 攪乱溝出土遺物③



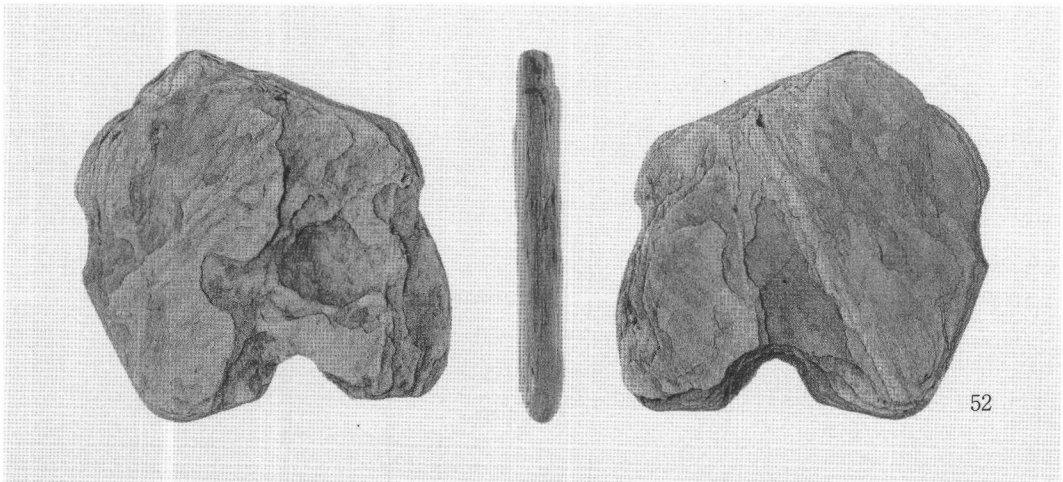
(1) 河川1 攪乱溝出土遺物④



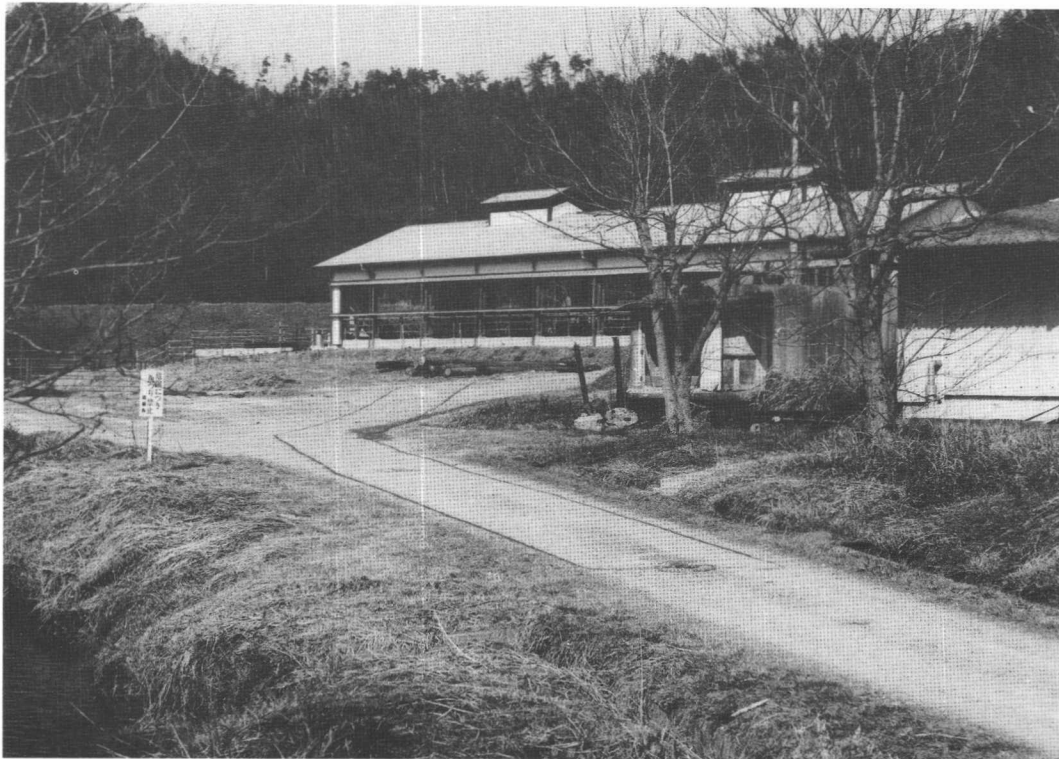
(2) 河川1 攪乱溝出土遺物⑤



(3) 河川1 攪乱溝出土鉄器



(4) 河川1 攪乱溝出土石器



(1) 調査前全景 (南から)



(2) 調査区全景 (南から)